

プロタゴラス

プラトン 著

菊池慧一郎 訳

凡例

- ・底本における旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いを新仮名遣いに改めている。
- ・コードの振られていない漢字「ト+畏」が使われている。圏点付き「畏」で代用する。
- ・濁点付きの踊り字は底本では「ゝ」に濁点であるが「ゞ」で代用している。
- ・送り仮名で、「基いて」↓「基づいて」、「択む」↓「択ぶ」とした。
- ・カタカナ表示で、底本に対し次の変換をした。「オヂセウス」↓「オデイセイア」↓「オヂセイア」、「ドリポロス」↓「ドリフォロス」、「ペイヂアス」↓「ペイディアス」
- ・【】で挿入した注記は、すべて本PDF作成者による挿入である。
- ・ルビは、底本ではいくつかがあるが、漢字の読みとして付けたものは作成者によるものである。
- ・本文中に挿入された訳者の注○を一ポイント小さくした。
- ・底本では段落に節番号を振り、各ページに節番号が記されているが、これは省いた。代りに、段落頭に付けられている▲に番号をルビとして付けた。
- ・「＊」を付した訳者注は巻末に段落毎にまとめて書かれている。各ページの節番号を省いた関係で底本の「＊」は、段落毎に番号を振ったものに変えた。また底本では▲で区切られ改行無しであったが、▲はなくし、項目一つずつ改行した。
- ・底本にあるギリシャ文字では「κ」となるべき所「x」に見えるが「x」とは区別されている。

本PDFは、John Burnetの編輯になる"*Platonis Opera*"第三卷の中の「プロタゴラス」を菊池慧一郎が訳したものである。国会図書館デジタル資料として公開されているが、そこでは一八一〜二頁が欠けている。本PDFでは完本を底本としたので欠落は無い。
以下の目次は作成者による追加。

目次

翻訳上のこと

プロタゴラス篇前説

第一節 友人 おいソクラテス 第二節 今朝のこと 第三節 次いで我々は

第四節 それぢや君は 第五節 是に次いで僕は 第六節 此事に意見が

第七節 そこで我々は中へ 第八節 さて我々は中へ 第九節 さて我々が一同席に

第十節 そこで僕は曰った 第十一節 さて今は昔 第十二節 さて茲に人間は

第十三節 さて是を要するに 第十四節 さて猶茲に疑問が 第十五節 實際彼等は其子供を

第十六節 然らば如何なる 第十七節 プロタゴラスは是程の 第十八節 おゝソクラテス

第十九節 さて若し其次に 第二十節 或ことを無思慮 第二十一節 するとプロタゴラスは

第二十二節 彼が此事を語り終る 第二十三節 すると是を受けて 第二十四節 此事をプロヂコスが
 第二十五節 此演説はそこに居る 第二十六節 そこで彼はこんな風に
 第二十七節 プロヂコスは此事を聴いて 第二十八節 そこで僕は曰った
 第二十九節 抑々私の言ったことが 第三十節 さて此後で彼は 第三十一節 此等のこと一切を
 第三十二節 おゝプロヂコスにプロタゴラス 第三十三節 そこで僕は曰った
 第三十四節 では、おゝソクラテス、儼は 第三十五節 おゝプロタゴラス、貴方は、
 第三十六節 そこで僕は曰った 第三十七節 しかし其が可笑しな 第三十八節 此等のことを先ず
 第三十九節 そこで僕は曰った 第四十節 そこで僕は曰った
 プロタゴラス篇注

目次2

友人とソクラテス	: p309-310A	
ヒポクラテスとソクラテス	: p310B-314C	—— 教えを有償で受けることを繞って
カリ阿斯邸訪問	: p314C-316A	—— 邸と客人達の様子
プロタゴラスの登場	: p316B-320C	—— 紹介、訪問の意図、徳は教えられるか

プロタゴラスの説話	： p320D-328D	—— 徳についての神話的説明とロゴスの解説
プロタゴラスとの対話 1	： p328E-335C	—— 徳、正義、敬虔そして思慮を続つて
一座のソクラテス引き止め	： p335D-338E	—— 帰ろうとするソクラテスをソフィスト達が引留める
シモニデスの詩を繞つての対話	： p339A-342A	—— 詩の解釈をプロヂコスを交えて論じ合う
ソクラテスのシモニデス解釈	： p342B-348C	—— 詩への解釈の弁舌と詩論の打ち切り
プロタゴラスとの対話 3	： p348C-352D	—— 智慧と勇氣に関して、快は善なり
プロタゴラスとの対話 4	： p352D-359A	—— 架空的世人を介在させて、快苦・善悪と智慧
プロタゴラスとの対話 5	： p359A-362	—— 臆病と無智、徳は知、結び

原文について。原文はオックスフォード大学出版の、バーネット氏の整理せるもの【"Platonis opera" Vol.3】である。当篇に於ては原典批判上に特別の問題を見出さなかつた、但し引用されたシモニデスの詩に関しては、(第三十節最後に在る二行の詩句は、一行に書かれて、而も詩句として取扱はれていない、かゝる点に関しては) ネッスレ氏(トイブネル脚注本)に従つた。

分節について。原書にはもとより分節はなかつたのであるが、後人が之を試みてより、現に広く世に行はれている、従つて其を示す為に、本文中には其節の初頭に▲を冠し、第何節と云うのを側部に掲げることにした【本PDFでは節番号は省いた】。

頁数について。原書中の個所を指示する為に、一般にステファヌス版の頁数を使用することになつてゐる、従つて参考上の便を慮つて、之を上部の余白に記しておく。但し其位置は勿論大體の見当を示すに留まる。【本PDFでは更に若干のズレがある】

附記——ステファヌス版一頁はかなり長いので、更に *abode* の五部に分かれたれている、よつて(325d)とあれば、三二五頁の最後の方を求むれば、其個所を発見し得る訳である。

括弧について。当訳に於ては（）式括弧を使用せるのみである、其は簡単なる注を括っている。注について。注は故事言語上等のことを主とし、簡略を旨としたが、ミトスや引用詩句については、読者の興味、了解を助くる為に、稍詳説することを試みた。更に注するに当って、本文中に番号を付することは煩に陥る嫌いがある、よって単に星を加え、分節を利用してある【本PDFでは番号に変えた】。

引用ヘラス語について。固有名詞等、引用されたるヘラス語は総て原音に近き片仮名を以てし、且つ人名地名に於ては長音符号を省いた。

プロタゴラス篇前説

熟々思い看るに、^{ただ}營に西欧文明の源泉としてのみならず、其自体の光耀に於て泰西文華史上に萃を抜き倫を離れ、真に古典たるの栄位を占めるアテナイの文化、而も其文化に於てげに驚異すべき大風雲を捲き起したる者は誰あろう、アブデラの智識プロタゴラス（紀元前四九〇—四一五）であつた。さて此啓蒙思想家の巨頭プロタゴラスの齡已に七十を過ぎたる晩年のアテナイ市訪問を縁となし、之に配するに是れ亦絶世の巨人ソクラテス（四七〇—三九九）を以てし、更に當時の言論界に一方の驍將^{ぎやうしやう}として知られたるプロヂコス（四八〇—四〇〇）ヒピアスを拉し來り、間飾するに美青年アルキビアデスを始め、有言無言の貴族の子弟等を加え、彼等をして其方の好事家たりし富豪カリアスの邸に会せしめ、茲^{ここ}に談論の一大劇は演じ出だされた。而して更に其内容を味う時、其言端語端に夫々の人物の個性的特長は強く顕揚せられつゝも、全篇を一貫して実に彼独自の思索は進められ、其計画は成り、遂に理想主義即プラトン主義とまで言わるる程の偉大なる哲学的發展を未來に約する磐石の礎は此処に設置されている。是に由つて之を觀れば、抑何者か、此プロタゴラス篇を以てプラトンの初期諸篇の中に於て誠に第一位を占むべき傑

作であると謂うことを、礙^{さまた}げ得よう。

ソクラテス、プロタゴラス等の人物乃至思想、之を其所^い謂^わる客観的正姿に於て述べると云うことは哲学史の領域に属し、よし既成の哲学史より得らるゝ其知識は自己に於て仮設に留め置くべきであるとしても、吾が読者にとって、此点に関しかゝる方面よりの補助を得ることは、極めて容易である、よつて其に言及するのを要を認めない。さて此篇に描かれたるソクラテス、其は、劇的作品に於て常に見るが如く、直に眞の史實的ソクラテスであると云うことはできない、而もまたプラトンによつて了解されたる限りの彼の似姿でもない。然らば何であるか。其は実にプラトン自身がのりうつれる、ソクラテスに他ならない、従つてソクラテス自体の個性的特長は全く形式上に現わるゝに留つてゐる。人間的知識の前には全く不可思議の怪傑ソクラテスは多感多才なりし若き哲人プラトンの上に偉大なる感銘を与えた、而して彼は其受けたる感化を或は忠告とし、或は教示とし、或は信念として、絶えず之を自己に反省することを怠らなかつた、此感化を其反省によつて型れる所の者、是れぞ形式的ソクラテスに盛られたる其内容に他ならない。さてソクラテスもかく見來ることによつて、当篇の思想内容はプロタゴラスとプラトンのソクラテスとの哲學的問答(Symposium)として其真相を現わして來る。此問答に於て其主客は其兩極として立つ、

従つてプロタゴラスは茲に其対極として、其限りに於て独立せる一家の見識と豊富なる知識とを有せる思想家としての其個性を保持して失わない。しかし其と同時にその彼は、プラトンによつて劇的に描き出されたるプロタゴラスとして、其思想上、プラトンの中に消化され、了解されたる限りのプロタゴラスと見るべきである。かくて此プロタゴラスは先のソクラテスとは異なる意義条件の下に、其個性と其プラトン化との両面を表現している。我々は更に當時の錚々たるソピステスとしてプロヂコス及びヒピアスに遭遇する、しかし彼等の人物特長の如何に至つては当篇に於て直接味わるゝ限りに於て我々には充分であらう。

我々にとつて、此問答の両極についての了解が斯く成立するに於ては、真のプラトン自体を求むることは極めて容易なことであらう。Thesis のプロタゴラスと Antithesis のソクラテス、此兩者を超越して終始發展せる問答其自体こそ Synthese のプラトンである。若し此一種三角的關係を当篇に於て深くも洞察し得る者有らば、其者はプラトン哲学の發生期に於て占むるプロタゴラスの重要な位置に想到せざるを得まい。真に思想家としての偉大なる獨創的天分を稟けて生れしプラトンにとつて、其精神的萌芽に一定の方向を教示し、よつて理想主義哲学の出発にとつて不可欠の因縁をなせる者は正しくソクラテスの彼に与えたる警告である、しかし其組織立て、理

論化に向う初期の第一歩に於て、よし其大部分は消極的であるとしても、猶積極の一分を以て、此啓蒙思想家の彼に及ぼしたる影響の如何に大なりしかも亦看過さるべきではない。更に人若し其哲學的問答自体の進向に順い、そこにプラトン自身の武歩を討検するならば、換言すれば當篇を全部其著者プラトンの思想に還元して、其發展の迹を辿り味うならば、人は啻に全篇を一貫せる思潮に乘じ得るばかりでなく、更に著者の細心の考慮によつて陰密に試みられたる概念發展の妙技に恐らくは歎声を禁じ得ないであらう。

然らば吾が所謂る概念發展とは如何なることであるか。之に言及する前に我々は當篇の序曲たる第一節に一瞥を与えよう。なぜかと云えば、プラトンの著作の中に於て序曲を有する者は數篇有る、しかし當篇の其の如く善く全篇の意図を縮寫し、よつて眞に *prologos* の役目を演じている者は他に其例を見ないからである。さて此序曲を読むに、我々は二重の意図をそこに発見し得る、其一はソクラテスのプロタゴラスに対する優位を描き出だざんとすることである。此意図は先ずホメロスの詩を以て暗にソクラテスを智慧深きオディセウスに比し（第一節、第八節注参照）次いで頭わにプロタゴラスの令名を、美青年の狩りをのみソクラテスに向つて問題とする程度の市井の遊人を介して先ず伝えし此序曲に出発し、着々其計画を進め、遂にプロタゴラスの告白せる

讃辭（第四十節）を以て終焉している。しかしプラトンは茲でソクラテスの優位を彼自身の口から立証しようとした、此方法は常にプラトンの用いし所ではあるが、或はパイドン、或はアルキビアデスの讃歎による彼の人格描写が——勿論其は思想の円熟期には属しているが——成功せる如き結果を将来することを許さないばかりでなく、無知の知者をして反つて有智の智者たらしめている。然り而して当篇を看るに、寧ろ此方法によつて血氣のプラトンは自らソクラテスにのりうつり、彼をして其智に於ても、更に其饒舌に於てすらプロタゴラスに張合わせねば息まなかつた趣がある。げに序曲中に在る『多くの事を言いもし、聴きもした』の一句は再び最後の結句として『此等の事を言いもし、聴きもして、我々は去つた』なる形に於て現われている、我々は茲に作文上の起結の一致を見るばかりでなく、若し第七節の叙景を対照するならば、謀反的な其意圖を味おうて余り有るであらう。

さて其第二の計画とは何であるか。美の概念の發展である。最初に友人によつて評されたアルキビアデスの美とは実に肉体的性欲的な美に他ならない、従つてそこに用いられている若盛り(ᾠον)は、其原意たる季節、時期に顧みても、全く青春の盛りである。次に其冷かしに応酬してソクテテスの説ける彼の美は、引用されたるホメロスの句が、アルキビアデスが当時其モデル

であつたと云われている、ヘルメスを歌えるものであるに徴して、男性的英雄的美である、よつて我々は茲に若盛りの代りに男盛り (Hib) なる文字を発見する、然り而して最後に最智即最美の主張が強くも亦明かに打開されているではないか。此美の概念の三段階は、其が最も通俗的な意味から出発して、最も高尚なる意味に迄進められていることを示している、而してかゝる漸進的概念発展は本文に於て到る處、殆ど重要な所有する文字に於て試みられているのである。訳者は、吾が自ら索ね得たる限りに於て、之を再び読者の思索に委ね得る爲に、特に努力した、而して其爲に、許し得らるゝ限りに於て、各字に一定の訳語を施すことを企図した、併し勿論本来一定の単語によつて一貫されていけない、又翻譯上かくなし得なかつた、従つて意味の上からのみ推究さるべき陰なる発展も多いのである。訳者は茲に一言しておく、読者は此訳書の上に於て之を辿ることの困難を欺く必要【「必要」はない、原著を読み得る者の殆ど総てによつてすら、其跡は辿られずに隠れていた程であるから。しかし読者の辿ると辿らざると、辿り得ると得ざるとに拘らず、有りし言語の上に有らしめむ意味を与えんとせしプラトンにとつて、其努力は構造的技巧上の苦心以上に出ている、而して明かに其跡を辿り得る者にとつて、例えば哲学史上に見る gegen (德) の二重義によるキマイラの問題の如きも——恐らく其問題の起りは当篇であらうが、

——其は如上の發展中に於ける通過点 (moments) として流れ矢せるに相違ない。更に此概念發展と共に全思想の主潮も次第々々に高まつて行く、而して其流れを検する時に、人は、人間の精神の三方面たる知情意に相当せる知識・幸福・道德の三概念が互に錯綜しつゝ進展して、終に全き一致に到達していることを、發見するであらう。

プラトンの思想は、其過程を辿ること、決して容易ではない、其には哲學的訓練を最も必要とする。しかし其訓練は直接プラトンの上に於て恐らくは最も善く為し得るに相違ない。然り而して此訓練を成就し得る為には、換言すれば、真にプラトンの門を叩き得て開く為には、読書百編、義自ら通ずる底の古典學的努力と、温古知新の古典學的眼識とを欠いてはならない。抑々古典は實に鉦山の如く、古典學は茲に探鉦學にも譬うべきものである。人若し善能なる鉦山師でなかつたならば、そこに鉦脈を發見し、以て無尽の黄金を拾出すること能わず、世界の宝库に入りながら、空しく草芥の彪茸を分くる止まらう。

プロタゴラス

友人 ソクラテス

▲友人 おいソクラテス。何処からやつて来た。無論のことアルキビアデス¹の若盛りを狩つて来たんだらう。現につい先頃も途中で見掛けたが、いつもながら美しく僕には見えたつけ、あの男³は。いや全くの男一人前だ、ソクラテス、我々仲間での評判通り、それに鬚髻^{しゅげん}ももうすっかり積んで来ているね。

ソク それで其がどうだと言うんだ。君は元来ホメロスの讃歎者な筈ぢやないか。ところであの詩人は歌っている、髯萌え出でし若さこそげに優美の極みなれと⁴。其男盛りに今アルキビアデスは榮えているのだ。

友人 其はそうと、今の事はどうなのだ。彼の処から来たに相違あるまい。ところであの若いのは君に対してどんな振舞をしているかね。

ソク 好い、少くも僕にはそう思われた、それにまた今日と云う今日は中々常にも劣らなか

ったね、なぜかと云えば僕の味方をして僕の為に大いに弁じてくれたもの。そこで現に今はあの男の処からやつて来たのさ。ところがちと君には合点のゆき兼ねる話があるんだ、と云うのは、あの男は傍に居たのだが、僕は別に心向けもしなかった、いや度々たびたびは彼のことを忘却していた位だったのだ。

友人 どうしたんだ、抑々君とあの男との間にそんな事が起つたと云うのは。まさか此町中でのことだもの、他のもつと美しいのに遭つたと云うこともあるまいし。

ソク どうして素晴らしいのにさ。

友人 何だつて、町の者か他国の者か。

ソク 他国の者だ。

友人 何処の。

ソク アブデラ五の人さ。

友人 すると其他国の人五は、クレイニアスの息子よりも美しいと君に見えた程、其程までに美しいと君には思われたのか。

ソク 最も智と云うことが、君、最も美しいと見えないでどうする。

友人 では、ソクラテス、君は誰か智者に会つて我々のところへ来た訳か。
 ソク 先ず今の世の人々の中では最も智なる者にさ、若し君に最も智たる者はプロタゴラスであると思われるなら。

友人 何ですつて、プロタゴラスが来泊されたのですつて。

ソク 三日も前のこつた。

友人 すると君は今あの方と一緒に成つてから来られたので。

ソク 全くだ。而も多くの事を言いもし、聴きもした。

友人 ではどうでしょう、其交際の模様を是非すつかり談してはくれませんか、

若し君に何も碍げがなかったなら、此処へ腰を下して 此パイス⁸を立たせて。

ソク よかろう。それに若し君等が聴いてくれるなら、僕は感謝する。

友人 いや。君が若し談してくれるなら、我々の方こそ君に感謝する次第です。

ソク では感謝が二重である⁹、しかし聴きたまえ。

▲^二今朝のこと、夜明けにはまだ程遠い時分に、アポロドロスの息子¹で、パソンの弟であるあのヒ

ポクラテスが扉を杖で激しくたた敲いていた、そこで誰かゞ彼に扉を開けてやると、彼は直ぐ様慌たしく這入つて来ながら、大声をあげて

おゝソクラテス、寤さきて【寤めて】いるんですか、寐ねているんですか。

と叫んだ。僕は其声で彼であることが分つたから

ヒポクラテスだな。何か変つた事件でも報せに来たのか。

いええ。善い事なんですよ。

それは結構だ、しかし何だ其は、何の事で今時分に來たんだ。

プロタゴラス、あの方が來られたんですよ。

彼がそう言つた時には、もう僕の傍に立つていた。

おとゝいさ、しかし君は今頃知つたのか。

全くです、神々に誓つて、昨晩でした。

其時に彼は寢台を手探りして、僕の足の側に腰を掛けて言うには

実は昨日の晩、かなり晩くオイノエ2から歸つて來た時でした。と云うのは、あのパイスのサチロス3が私の許から逃亡したのです、其時に私は余程、彼を追掛けて行くことを、貴方に報せよう

と思つたのですが、何かの事で忘れてしまつたのです。そして歸つてから、皆して食卓に着き、もう寝に就こうとした時に、兄が私にプロタゴラスが来たと伝えてくれたのです。そこで直ぐにも貴方の処へ飛んで来ようとしたのですが、考えて見れば、もう夜もだいぶ更けていたのです。さて一寐入りすると、速くも疲が去つたので、直ぐ起き上つて、此通り此処へ来た次第です。

そこで僕は彼の勇敢ではあるが、また性急なのを見て取つたので

其が君にどうなんだ。何か君にプロタゴラスが不正な事でもしたのかね。

すると彼は笑つて曰つた

そうですね。神々に誓つて。おゝソクラテス、あの人は自分だけが独り智者で、私を其には為てくれないのですもの。

だが、ゼウス！ 若しあの人に銀を払つて、彼を説服しさえすれば、君をだつて智者にしてくれるさ。

おゝゼウスや神々に誓つて、若し其でできるならばです。それなら私の財産、或は更に友達の財産を以てすれば、事を欠きますまいが、しかし実は此事で今貴方の処へ来たのです、其は私の為にあの人和貴方が話し合つてくれればよいと思つて。なぜかと云えば、私はまだ極めて弱年で

はあるし、其上未だ曾て^{かつ}プロタゴラスを見たこともなければ、まして聴講したこともないのですから、此前に彼が此町を訪れた時には、私はまだほんの子供だったのです。しかし。おゝソクラテス、誰一人あの人を誉めない者はないし、総ての人が彼を語るに最も⁴智なる者であると言っています。とにかくあの人の処へ行かないと云う法がありますか、在宅中を捉える為に。私の聞いた所では、ヒポニコスの子のカリアスの許に滞在しているのです。しかし、さあ、行きましょう。そこで僕は曰った

だが、君、そっちへ行くのはよそうぢやないか、まだ早いんだから。其よりこつちの中庭⁵の方へ出よう、そして歩き廻りながら、明るくなる迄時を消そう。それに大概プロタゴラスは内に居る人だ、だから安心したまえ、我々は恐らく彼を在宅中に捉えることができるに違いない。

▲^三次いで我々は立ち上つて中庭に出で、そちこちと歩き廻った。そこで僕はヒポクラテスの根氣を試しながら。彼の人物を観察しようと思つて曰った

おいヒポクラテス、僕に談してくれないか、君は今プロタゴラスの処へ行つて、君自身の為に教授料として銀を払おうとしているが、一体君は何人の^{なんびと}処へ行つて、何に成ろうとするのか。喩^{たと}えばアスクレピアダイの、君と同名な、コスのヒポクラテスの許に行つて、教授料を払おうと君

が考えたとして、その時に誰かゞ君に、『僕に言ってみないか、ヒポクラテス、君はヒポクラテスに銀を払おうとしているが、彼を何人としてか。』ときいたなら、君は何と答えるか。

医者として、と曰います。

『何に成ろうとしてか。』

医者に。

では若しアルゴスのポリクレイトス²かアテナイのペイディアスの許に赴いて、君自身の為に彼等に銀を払おうと思つた場合に、誰かゞ君に、『ポリクレイトスやペイディアスを君は何人だとして、彼等に銀を払うのであるか。』ときいたなら、何と答えるか。

彫刻家だとして。

『君自身は何に成ろうと思つてか。』

無論彫刻家に。

よし来た、僕と君とは今プロタゴラスの許に行つて、彼に教授料として君の為に將に銀を払おうとしているのだ、それで若し我々の財産で充分であつて、其を以て我々が彼を説服することができればよし、さもなければ友達の財産まで注ぎ込もうとしているのである。そこで若し誰かゞ

我々の此事にこんなに夢中になっているのを見て、『おゝソクラテスにヒポクラテス、僕に言つてはくれないか、君等はプロタゴラスを何人だと思つて、彼に銀を払おうとしているのか。』と曰つたら、我々は何と答えたものだろう。どんな名が他にプロタゴラスについて呼ばれているのを、我々は聞いているか、例えばペイディアスについては彫刻家、ホメロスについては詩人と云う様に、プロタゴラスについては、どんな名が称えられているか。

おゝソクラテス、ソピステス⁴と人々は彼のことを呼んでいます。

すると我々はソピステスとしての彼に銀を払おうとしているのか。

全くです。

では更に若し誰かゞ君に、『君自身は何に成ろうとしてプロタゴラスの処へ行くのか。』ときいたとしたら。

すると彼は顔を赧くして——既に夜も明けて来たので、彼の顔もはつきり見える様になつたんだ——そして言うには

先の事と比べて言つても、ソピステスに成ろうとしているのは明白ではありませんか。

しかし、神々に誓つて、君はヘラスの人々の中へ自分をソピステスとして示すことを恥辱とは

思わないか。

でも、ゼウス！ 全くはそうなのです、おゝソクラテス、若し私の考えている事を其俚に言わなければならぬとすれば。

しかし、ヒポクラテス、君は君がプロタゴラスから將に学ばんとすることがそんな意味であると考えている訳ではあるまい、むしろ曾て国文教師やキタリス⁵音楽教師から学んだと同様な意味にであろう。と云うのは、其等の学課を君は、本職に成るつもりで、専門的に学んだのではない。むしろ素人であり自由である者に相応⁶わしいように、教養としてゝあつたのだ。

なるほど、自分に考えて見れば、プロタゴラスに学ぶと云うことも、むしろそう云うことなのです。

▲^四それぢや君は、自分が今何を為ようとしているんだか、知っているのかね、恐らく分つていないのぢやないか。

どう云うことについて。

つまり君が君自身の魂を君の所謂^いソピステスなる者に委ねて、看護^わしてもらおうとしていると云うことをさ。しかしソピステスなる者は一体何^いで有るか、若し其を君が知^しっているなら、僕

は感服する。ところが若し其を知らないとすると、何者に君が魂を委ねるのか、一体善い事柄にか、悪い事柄にか、其を君は識らないことになる。

私としては知っているつもりです。

では言ってみたまえ、君はソピステスを何で有ると考えているのか。

私の考えているには、其名の語る通り、其者は諸智の智識です²。

だが其は画家や工匠についても言うことができる、彼等は諸智の智識であると。しかし若し誰かゞ我々に、『画家は諸智中何の智識であるか。』ときいたとしたら。我々は彼に、諸像を描写する智の、と答えるだちう、他の事についても亦同様に。そこで若し誰かゞ今の事について。『ソピステスとは諸智中何のであるか。』ときいたならば我々は彼に何と答えたものだろう。どんな働きの智者であるか。

其を他に何で有ると我々は謂うことができません³。語るに畏るべき者を作るの智者と謂う以外に。

まず君の謂う所が正当だろう、しかし決して充分ではない、なぜかと云えば其答えは尚我々に問いを要求しているもの。其は、何についてソピステスは語るに畏るべき者を作るのであるか、

との問いだ。例えばキタリス音楽教師は其事の智識を作るとともに、其事について、つまりキタリス楽について、語るに畏るべき者を作る、そうではないか。

そうです。

よし来た、ソピステスは何について語るに畏るべき者を作るのか。

勿論彼の知識している事についてです。

そりゃ。そうさ。ところでソピステスなる者が自身其事の智識でもあり、また其弟子をも作る、其事柄は一体何であるか。

ゼウス！ どうも是以上私は貴方に答える術を知りません。

▲^五是に次いで僕は曰った

どうだね、君は自分の魂をどんな危険に曝そうとしているのかを知っているか。若し君の体が良く成るか悪く成るかの危機に際して、君が其体を何者かに委ねなければならぬとすれば、君は（其人に）委ねべきか否かを所有^{あらず}る方面から考究し、友達や親身の者どもを相談に呼び寄せ、而も永い時日に互つて考慮するだろう。ところが其肉体よりも遙に貴重なるものであると君が思考している者、即ち魂、而も其に、其が良く成るか悪く成るかにつれて、君の万事が或は良く行

き或は悪く行く（幸不幸）と云うことが拠つてゐる、其事について、つまり君の魂を現に此都市へ来たあの他国者に委ねなければならぬか、どうか、と云う事について、別に親にも兄弟にも更に我々友人にも相談をしていない、ところで君の言う所によると、昨日君は聞いたんだ、そしてもう今朝早くやつて来ている、而も君自身を彼に委ねなければならぬか、どうかと云う事などについては、一言もしないし、無論相談も無い、のみならず自分の財産や更に友達の財産をも注ぎ込もうとまでしているのぢやないか、まるで何でもかでもプロタゴラスと交際しなければならぬと云うことを、既に決意しているといったように。ところが君の談によると、君は彼を知つてもいなければ、会談したことだつてない、唯ソピステスと呼んでいるだけで、ソピステスと云う者が一体何で有るかについて知る所が無いらしい、而も其者に君は自分を委ねようとしてゐるのぢやないか。

彼は之を聴いて

おゝソクラテス、全くそのようでした。貴方の言われるところによつて考えてみると。

ところが、ヒポクラテス、ソピステスと云う者は魂の養いになる品物の貿易商人か小売商人かなのだらう、少くも僕にはそう見えるのだ。

おゝソクラテス、魂の養いとは。

学識さ。ところで、君、ソピステスが自分の売る品物を徒に褒めて、我々を欺かないといいんだがね、まるで肉体の營養物を商う貿易商人や小売商人のように。と云うのは、彼等商人は自分達の持ち歩く品物について、自身、どれが肉体に有益であるか有害であるかを知らない、而も総て売出す物を褒めている、又彼等から買う者も、体育教師か医者でない限りは、やはり知らない。其と全く同様に、多くの都市に学識を持ち歩いて、卸したり小売したりする者は、いつでも其を欲求する者に向つて自分の売る物を褒める、がしかし、君、自分の売る物について、どれが魂に有益か有害かを知っている者は殆どない、又彼等から買う者も、魂に関する医者でない限り、全く同様である。そこで若し君がそう云うものについて、どれが善いか悪いかを知識しているならば、プロタゴラスからでも、また誰から学識を買ったところで、それは安全である。しかし若しそうでないとすると、君、考えてもみたまえ、最も親身なる者を賭けて博奕をやり、危険を冒すことになるのだ。それに学識を買うのは食物を買うのより危険が甚だ多いのである。なぜかと云うに、食物や飲料は、其を小売商人や貿易商人から買つても、他の器物に入れて持ち去ることができる、そして飲んだり食べたりして肉体の内に摂取する前に、先ず家に置いて、其に詳しい識

者を助けに呼び、どれは食べねばならないか、飲まねばならないか、どれはいかぬか、又どの程度に、又何時と云うことの忠言を聴くことができる、従つて其を買うのは太して危険ではない。然るに學識は他の器物に入れて持ち去ることができない、むしろ代金を支払えば、直ぐ學識は之を魂其物の内に取り入れ學んで、斯に或は害を受け、或は益を受けて去らなければならないのである。さてしかし此事を我々は我々より年長の人々と与にも考察した方がよからう、我々はこう云う事を断定するにはまだ若過ぎるから。そこで今は、我々が思い込んでいたのもあるし、それから、あの人の許に行つて聴こう、次いで、彼から聴いてしまつたら、更に他の人々とも相談をしようぢやないか、あそこにはプロタゴラスばかりぢやない、エリスのヒピ阿斯も居るし、多分はまたケオス³のプロヂコスも居るだろう、それにまだ他の多くの智者達も居ることだしするから。

▲^六此事に意見が一致したので我々は出掛けた。さて我々があの家の外庭に達した時に、我々は立停つて、途中で思い當つた事柄について話し合つた。それは談が途中で切れてしまわないように、つまり最後まで徹底的に話し終つてから、中に這入ろうと思つて、外庭に立つて互に意見の合致する迄話し合つたのである。ところが番人は、奄人^{えんじん}のように僕には思われたが、我々の談を聞いていた、それに彼はソピステスの群があの家へ押し掛けるのに弱らされていたらしい、我々が

扉を敲くと、開いて我々を見たが、『誰だ、ソピステスどもか、主人には暇が無いよ。』と曰つて、思ふ存分両手で扉を締めてしまった。そこで我々はまた敲いた、すると彼は扉を閉めたまゝで、『お前さん方、主人には暇が無いと云うに、聞えなかつたのかね。』と応えて曰つた。『だがね、君——と僕は曰つた——我々はカリアスの処へ来たのでもなければ、ソピステスでもない、だから安心したまえ、プロタゴラスに面会する必要があるであつて来たんだ、そう通じてくれ。』そこで其男は不承々々我々に扉を開いてくれた。

▲^七そこで我々は中へ這入つた。するとそこに柱廊を逍遙しているプロタゴラスを我々は見出した、また彼の後に列を作つて多くの人々も一緒に逍遙していた。其一方の列の中にはヒポニコスの子のカリアス、彼の同母弟でペリクレスの子であるパラロス、グラウコンの子カルミデス^二、又他方の列の中にはペリクレスの息子の中の他の一人クサンチポス、ピロメロスの子ピリピデス、メンデのアンチモイロス^三が見えた。此アンチモイロスはプロタゴラスの弟子の中で最も名声があり。且ソピステスに成る目的で、専門的に学んでいるのである。此等の人々の後に随いて傾聴している者どもの多くは他国の人々であるように見受けた、つまり彼等をプロタゴラスは、彼の遍歴した数々の都市から、恰もオルペウス^四のように、其声を以て魅しながら引連れて来たのであり、

彼等は魅せられながら其声の後を追っているのである、又其コロスの中には此土地の者も数人居た。僕は此コロスを観覧しているのが実に心地好かつた。彼等はプロタゴラスの前へ踏み出して礙さまたげになつてはならないと、心の配りも麗しく、又あの人が転廻すると、彼に随っている人々も亦転廻する、其時には如何にも善く、如何にも秩序正しく其聴講者達は左に右にうち分かれる、そして円を描いて廻り、いつも其後に美しくも連なっているではないか。

「彼をば次いで我は氣付き見ぬ」——とホメロスは云つた——エリスのヒピアスを彼は反対の側の柱廊で帝王椅子に腰を下していた、また彼の囲りには腰掛に阿克メノスの子エリクシマコスやミリヌス⁸出のパイドロス、アンドロチオンの子アンドロンや、また他国の人々では、彼の故国の市民達や他の都市の人々が座を占めていた。見受けたところ、彼等は自然や天体現象について天文学的な事柄をヒピアスに質問していた。又彼は帝王椅子に凭りながら、彼等の一人々々に其質問について応答し、又詳しい説明を与えていた。

さて「またタンタロスをば我はうち見ぬ」——と云うのはケオスのプロヂコスが泊つていたからだ。彼は一室の内に居た、其室は以前ヒポニコスが宝蔵として使用していたが、今は泊り客が多い為にカリアスが空けて客室に使つていたのである。其プロヂコスはまだ軀を横たえ、数枚の

毛皮と、見受けたところかなり多くの夜着とにくるまっていた。彼の傍近く置かれた数脚の寝椅子には、ケラメイス¹⁰出のパウサニアスと、其パウサニアスと一緒にまだうら若い青年が腰掛けていた——彼は其天性に於て美しくも善いように僕には思われた、しかし其容姿に於ては実に美しい、其名はアガトンと聞いているが、彼がパウサニアスのハイヂ¹¹力であるのも至極尤だと思つた——此青年と、更にケピスの子とレウコロピデスの子との両アデイマントスと他に数人が見えた。彼等がどんな事について談し合っているのか、僕には室外から其を知ることができなかった。僕はプロヂコス¹²を聴こうとして随分努力してはみたんだが——なぜかと云えば僕にはあの人が極めて智且神的人であると思われたからだ——しかし音声¹³が低い上に、其が室内に反響してボムボンするので、其言葉が不明了にされていたのである。

我々はそこで中へ這入ってしまった、すると丁度其時に我々の直ぐ後からアルキピアデス——あの君も言うし僕も信ずる通りの美青年と、カライスクロスの息子のクリチアスとが這入つて来た。た。

▲^ハさて我々は中へ這入つてからも尚暫時^{ざんじ}立停つて其光景を打ち眺めていた。其から我々はプロタゴラスの前に進んで、僕が曰つた

おゝプロタゴラス、貴方の処へ私と此ヒポクラテスとは来たのです。

すると彼が曰った

儂^{わし}独りと対談したいのか、それとも此等の他の人々と一緒の方がいいのか。

そこで僕は曰った

我々はどつちでも構いません。ですから先ず我々の来た趣旨を聴いた上で、貴方自身が都合を
考えられてはいかゞです。

では何の目的で君等は来たのか。

此ヒポクラテスは此都市の者で、アポドロソスの息子なのです、其家は裕福なる大家であつて、
而も彼自身は其才能に於て同年輩の諸子と比肩する者であると思われています。ところが彼は此
都市に於て有数の人物に成ろうと志しているように私には思われますが、而も若し貴方と一緒に
成つたならば、彼に其目的が必ずや成就するであろうと云う考を起しているのです。そこで此事
について貴方が独りで我々だけと対談する必要があるか、或は他の人々と一緒でも構わないか、
其事をむしろ貴方の方が考えてみてください。

おゝソクラテス、君が予め儂^{わし}の為に配慮するのは至極^{もつと}尤である。なぜかと云えば、他国の者で、

大なる都市に赴き、而も其等の都市に於て若い青年どもの中でも特に優秀なる者どもを説服して、其土地の者とでも他国の者とでも、年長者とでも弱年者とでも、誰とでも彼以外の者との交際は之を棄てさせて、彼との交際を勧め、彼自身との交際によつて始めて彼等が最も善く成ると云うことを信ぜしめる、此事を敢て為る者は余程良く氣を付けなければならないのである。なぜかと云えば其事によつて起つて来る猜忌^{さいき}や他の種々なる敵愾心、陰謀と云うものは決して小さいものではないからである。さて是は儂の持論であるが、ソピステスの術と云う者は既に古くから有つた、しかし古えの人々の中で此術に達していた者どもは、其術が人々に嫌惡の情を起さしめることを恐れ、仮装して以て其姿を変えていた、其或者は此変装に詩を用いている、例えばホメロスやヘシオドス¹やシモニデス²、又或者は密儀や予言術を用いている、オルペウスやムサイオス³を中心とする人々が是である。又或人々は体育術を以てしているのに儂は氣付いている。例えばタラスのイコス⁴及び、元はメガラの者で今はセリムブリアのヘロヂコス⁵、彼は尚現に生きていて、誰に劣らぬソピステスである。更に君等の都市のアガトクレス⁶は音楽を以て変装しているが、是亦偉大なるソピステスであり、ケオスのピトクレイデスや其他の多くの人々も亦同様である。此等総ての人々は儂の主張する通り、憎惡を恐れて此等の諸術を変装に用いていたのである。然るに

儂は此等総ての人々と此点で其軌を一にしていない、なぜかと云えば彼等は一人として自己の其意図を遂行完成していないと儂は考えているからである。と云うのは彼等は人々の中でも特に都市の有力なる權勢者どもの、眼を晦^{くら}まसानかつた、而も其変装^{へんさう}なるものは全く彼等に対したものである。勿論民衆は云わば何も識らないのであるから、其等の人々が流布する言葉に和して、其を口吟している、ところが彼等が逃晦^{とうかい}【韜晦】を企てゐるのに而も逃げ損ない、其事情が暴露するに到ると、其計画は甚しく馬鹿げたものとなり、民衆をして必然強き敵愾心を起さしむるに到るのである、なぜかと云えば、かゝる人間は他の種々なる事以外に又人を欺く者である、と民衆は思うからである。そこで儂は彼等とは全然反対の道を進んで来た、そして儂はソピステスであり、人々を教育すると云う誓約を予告している、つまり隠して否定するよりは寧ろ顕わに告白する方が、先の方法よりも一層善い配慮であると儂は思っているのである。更に儂は其以外にもまだ他の事柄を色々注意している、その結果、神々と与^{とも}に言つて、ソピステスであると告白することによつて、何等か恐るべき事を加えられると云う事は一度も無かつた。更に儂は随分永い歳月に亙つて此術に従事して来ている、そこで儂の齡全体を数えたならば太したものである、年齢から云つてまず儂は君等の中の誰の父親でもあるまい、であるから若し君等に何事か希望が有

るならば、其等一切に關して此処に居る人々の面前で講説する方が、儼には特に最も悦ばしいのである。

僕は彼がプロヂコスやヒピアスに、我々が彼の恋人として来たことを誇りがに示し、得意振ろうと思つてゐることを察知したので

どうでしょう、プロヂコスもヒピアスも亦彼等と一緒に居る連中も呼ぼうぢやありませんか、我々の談を聴くことができるように。

其はそうだ。

するとカリアスが曰つた

では議席を設けようぢやないか、そうすれば君等は腰を据ゑて對論ができるから。

そうすることに意見がきまつた。そこで我々は皆、智者達の言を聴くことができるかと悦んで、各自に腰掛や寝椅子を運んでヒピアスの傍に用意を整えた——それは其処に前から腰掛が並んでゐたからだ——其間にカリアスとアルキビアデスの兩人が、プロヂコスを寝椅子から起して彼を、またプロヂコスと一緒に居た者どもをも、引張つて来た。

▲さて我々が一同席に着くと、プロタゴラスが曰つた

おゝソクラテス、此人達も此処に列席したのであるから、今さつき此青年の為に君が儂に対して注意を喚起した事を談してみたまえ。

私がやつて来た訳は、おゝプロタゴラス、其理由は今も前に言つたと同じ事です。つまり此ヒポクラテスは貴方との交際を希望しているのです。そこで若し彼が貴方と交際したならば、彼にはどんな結果が来るのであるか、其を彼は知りたいと言つています。我々の切望を言えば、是だけなのです。

するとプロタゴラスは是に對^{こた}えて曰つた

おゝ若者よ、若し君が儂と交際すれば、儂と一緒に成つた其日に君はより善く成つて家へ帰るようになる、また次の日も同様、更に毎日絶えずより善い方に進歩するのである。

僕は是を聴いて

貴方の言われることには、おゝプロタゴラス、別に不思議はありません、寧^{むしろ}当然なことです。譬^{たと}えば貴方にしたところで、よし其様な高齡で其程の智者であるとしても、若し貴方に貴方の知識していない事を誰かゞ教えた^しとすれば、貴方はより善く成^なるでしょう。しかし若し事情を異にして、今此ヒポクラテスが意志を翻し、つい先頃此都市を訪れて来たあの若い、ヘラクレオトス

の子ゼウクシポスとの交際を望んだとして、今貴方のところへ来たように、彼の許に行つて、貴方から聴いたと同じ事、つまり彼と交際すれば毎日より善く成り、進歩すると云うことを彼から聴いた場合に、若し彼に、『何についてより善く成り、何に向つて進歩すると貴方は言われるのですか。』と質問したならば、其ゼウクシポスは彼に、『画を描くことについて。』と答えるに相違ない。又若しテバイのオルタゴラスと一緒に成つて、貴方からと全く同じ事を彼からも聴いたとして、あの人に、彼と一緒に成れば、何について日々より善く成るか、を質した場合には、彼は、笛を吹くことに向つて、と言うでしょう。其と同様に貴方も亦此若者及び此私に告げてくさい、私は此男の為にこう質問しますから――此ヒポクラテスはプロタゴラスと一緒に成ることによつて、彼と一緒に成つた其日より善く成つて去り、又他の日も毎日同様に進歩すると云うのは、おゝプロタゴラス、何に向つて、また何についてですか。

するとプロタゴラスは僕の此言を聴いて

おゝソクラテス、君は如何にも美しく質問する、儂は美しく問う人々に答えるのが誠に悦ばしい。さてヒポクラテスは、儂の処へさえ来れば、ソピステスと云つても儂以外の誰なりとゝ一緒に成つて受けるような、悩ましい事を決して受けずにすむ。なぜかと云えば、他のソピステス達

は若い子どもを誘惑し傷つけているのである、つまり彼等は諸學術を逃れて来たばかりの若者どもを、其意志に反して引張つていつて、再び諸學術中にぶち込んで、数学、天文学、幾何学、音楽等を教えている。同時に彼はヒピアスの方を見据ゑた。ところが儂の許に來た者は唯全く其爲に來た其事をのみ学ぶのである。即ち其學課は私事に関する利智、つまり最も善く自分の家を齊ととのえることと、公事に関する巧智、即ち最も有力に都市の事を行い又語ることとである。

さあ、私は貴方の言葉に従つたものでしょうか。なぜかと云えば、貴方は政治の術を語られ、且市民たる善き人々を作ること誓われたように思われますが

其さ、其がつまり儂が広く告示している其宣言なのである。

▲⁺そこで僕は曰つた

どうも美しい教法を貴方は手に入れていられる事になるのですね、若し本当としたら。しかし私は自分の考えている俤を貴方に言う以外に、別に他意は無いのです。と云うのは、私は其が教えられるものであるとは思つていなかったのです、ところが貴方にそう言われてみると、さてもう信じないと云う訳にはゆきません。しかしどんな事から、其が教えられ得ない、つまり人々によつて人々に付与され得ないものである、と云う考を起したか、其を私は語らなければなりま

せん。さて私はアテナイの人々を、他のヘラスの人々も評する通り、智なる者どもであると主張するのです。我々が国民議會に集合する場合に、私はこう云う情景を見るのです。建築については都市が何事かを行う必要がある場合には、建築家を建築に関する発言者として、又造船については造船家を呼び出す、又其他一切の事についても、其が学ばれ得る、従つて教えられ得るものである、と彼等が考えている限りの事柄については、そうするのである。然るに誰でも、彼等が其人を専門家でないと思つてゐる其或る他の人が、彼等に向つて意見を述べようと試みてもしようものなら、たとい其人が美しい富んだ且名家の出であつたところで、彼等は何一つをすら承認しない、のみならず、其演説しようと試みる者が野次り倒されて自ら壇を去るか、或は守衛等が、ブリタネイスの命を受けて、彼を引き下し或は連れ去る迄は、嘲笑と喧囂^{けんきやう}を以て応酬するのである。さて彼等が専門に属すると思つてゐる事柄についてはかゝる行動を取る、ところが都市の事に関する治政^{ちせい}について何事かを會議しなければならぬ場合であると、大工であると鍛冶工靴工であるとを問わず、商人も船長も、富めるも貧しきも、貴きも賤しきも扱ふことなく、誰でも演壇に昇つて其事について意見を陳べる、而も誰一人として、先の人々の場合のように、此等の人々に、どこからも其について学んだことがなく、従つて彼には一人の教師も無いのに、なお意見を

陳べようとしていると云う理由の下に、其行動を拒みはしない。是を要するに、其が教えられ得るものではない、と彼等が思考しているのは明かである。なお都市共同の事柄に於てそうであるばかりではない〔一〕私的にも亦そうなのです。我々の市民の中で最も智であり最も善である人々と雖も、自己の持つている其徳³を他の人々に付与することができない。ペリクレス、此処に居る此青年の父、彼は此子供達を、教師等から得らるゝ事柄については、美しくも良く教育したが、しかし彼が自身智者である所以の者については、自身手づから教育もせず、又他の人に委ねもしない、そこで子供等は、見張りの居ない家畜^{かいこ}どものように、勝手に徘徊して牧草を喰つてゐる、其はまるで独り手にどこかで其徳に邂逅^{かいこう}でもするであらうと云つたようである。更にまた、よろしいか、クレイニアス、此アルキビアデスの弟、彼を今言つたあの人、ペリクレスが後見していた、そして彼がアルキビアデスの為に墮落させられることを恐れて、此男から隔離し、アリプロンの許に託して教育した、然るに六ヶ月もたゝない内に、アリプロンは、彼には手の施し様がないと言つて、ペリクレスの許に送り還してしまつたのです。此外にも、自分は善い人であるのに、身内の者でも他人でも、誰をもより善くしたことのない人々を、いくらでも掲げることが出来ます。そこで、おゝプロタゴラス、私は此等のことを見て、徳は教えられ得るものではない、と思

つているのです。然るに今貴方の言葉を聴くと、そうだ、と言われるので、私の考えはぐらついで来ました、そして貴方が多くのことを経験していられるし、学ばれたことも、自分で発見されたことも、極めて多いと云うことに考え合せて、必ずや貴方は何等か真なる事を言っているであろう、と思考しているのです。そこで若し貴方が、徳は教えられ得るものである、と云うことを我々に一層明了に、承知できるように、講演することができるとしたら、嫌とは言わずに、講説してください。

おゝソクラテス、なに決して拒みはしない。ところで君等にはどんな風な講演を試みたものだろう。儂はこんな老人であるし、君等はまだ若いのだから、詩話⁴を語ってみようか、それとも理実を以て詳述しようか。

すると圀りに座を占めていた多くの者どもが、彼の言を受けて、どつちでも彼の思う様に詳説してほしい旨を告げた。

どうも儂には——と彼は曰つた——君等に詩話を語る方が雅趣^{がしゅ}に富んでいるように思われる。

▲^十さて今は昔、神々は居られたが、死滅する種属はまだ存在しなかつた時代が有つた。ところが彼等にとつて誕生を運命づけられた時が到達したので、神々は地の下に、土と火と更に火や土に

混合している諸物から捏こね合せて彼等を型つた。さて彼等を光の方へ連れ出そうとした時に、神々はプロメテウスとエピメテウスとに命じて、彼等の装いを調べ、各々に至当なるように種々なる能力を頒わち与えしめた。するとエピメテウスは自分が頒はん与よしたいとプロメテウスに懇願し、『儼が分配するから――と曰つた――後で見てもらいたい。』そう説服して彼は頒け始めた。そこで或者どもには速さを頒たずに強さを付与し、弱い者どもをば速さを以て装つた。又或者どもをば武装し、他の者どもには武器を持たない性質を与えた代りに、保存の目的を以て他の或能力を彼等の為に考案した、そこで彼等の中、彼が小さい衣を以て包んだ者どもには、翼による避難か或は地下の住いを頒与し、又大きさによつて増大した者どもは、之を其大きさによつて救い、又さう云う風に其他の力をも平等に分配した。つまり彼は、何れの種属も滅亡してしまわないように注意しつゝ、其を巧みに案じ行つたのである。さて彼等が互に殺滅し合うことの無いように、夫々に避難の方法を講じてから、ゼウスからの氣候に對して其適応性を工夫した、そして彼は密生した毛と厚い皮とを以て彼等を包んだ、其毛皮は嚴寒酷暑を防ぐに充分なる力を持つてゐるし、又彼等が寢所に赴く場合には、同じ其毛皮が彼等にとつて、自分に專屬の、而も自分から生え抜きの、蒲団となるのである、又或者どもには蹄を、或者どもには厚い血の通わぬ皮を穿かせた。是に次

いで彼は各々に異つた食物を提供した、即ち或者どもには地から生ずる雑草を、他の者どもには木の実を、又或者どもには其根を与えた。更に彼が他の動物の肉を食物とすることを許した者どもも有る、かゝる動物には少産性を付与し、彼等によつて喰ひ亡される動物には、其種属を保存する為に、多産性を供した。

然るにエピメテウスは全くの智者と云う訳ではなかつたので、諸種的能力を悉く無理性なる動物にのみ使い果してしまつた事に一向気付かなかつた、そこで彼に人々の種属がまだ準備されずに残されていたのである、彼はどうしてよいか全く途方に暮れてしまつた。丁度彼が困惑しているところへ、プロメテウスが其配分を見にやつて来たのである、そして万物中他の諸動物は如何にも良く注意されているのに、人間だけは裸体、裸足、更に寝具も無く武器も持たないのを見出した、然るに運命づけられた日は既に來ている、其日の中に人間も地の中から光の方へ出なければならぬのである。そこでプロメテウスに、どんな救済法を人間の為に見出だしたものかと、当惑してしまつたが、遂にヘパイストスとアテナとの許から技術的の智慧を火と一緒に盗んで——なぜかと云えば、火と離して其智慧を獲得し使用することは何者にも不可能なことなのであるから——そこでそう云う風にして其を人間に贈つた。かくして人間は生活に関する智慧を得たの

であるが、しかし政治的の智慧は得なかつた。と云うのは其智慧はゼウスの手許に在つたのである、然るにプロメテウスにはあのアクロポリス⁴即ちゼウスの宮居に這入ることが許されてなかつたし、其上またゼウスの守備兵は恐しい者どもであつた、そこで彼はアテナとヘパイストスとが其内で技術を楽しみ励んでいる其共同の宮居に忍び込んで、火に燃えている、ヘパイストスとアテナとの、夫々の技術を盗んで、之を人間に与えたのである。是に由つて人間には生活の好き運びが得られたが、プロメテウスはエヒメテウスの為に、伝説の語る通り、後に盜竊^{とうせつ}の刑罰⁵を受けた。▲^{十二}さて茲に人間は神の所性を分ち持ったが為に、最初は神との其親屬關係によつて生物中唯独り神々を信じ、神々の祭壇や彫像を設置することに従事した、次いで音韻名辭を其術によつて速に工夫発音し、更に住居や衣服や靴や寝具や、地より生え出づる食物を発見した。是の如き準備を完成して最初の間人々は離散して住んでいた、つまり都市と云うものは無かつたのである。そこで人々は獸類によつて、彼等よりあらゆる点で劣弱であつた為に、次第に亡されて行つた、而も彼等の手工的技術は食物に向つては充分な援助であつたが、野獸との戦いに対しては無効であつた——なぜかと云えば彼等は政治の術を全く欠いていた、而も戦争の術は其一部を成しているからである——そこで互に寄り合い、都市の建設によつて救助し合おうと試みた。さて聚合^{しゅうごう}して見

ると、政治の術を持つていない為に、互に不正を行い、其結果再び離散して、また亡び行くのであった。そこでゼウスは我々の種属の全く滅亡し終ることを恐れて、ヘルメス¹を使者として、人々の内に畏敬と正義²とを、其等が都市の整調、結条として親愛の仲介者となるように、齋^{もたら}さしめた。するとヘルメスは、どんな風に正義と畏敬とを人々に与えたものかをゼウスにきいて曰った、『種々の技術が頒与されたように、そう云う風に是を分つたものでしょうか、其はこう云う風に頒けられているのです、つまり医術を知っている者が一人居れば、多くの素人にとって充分である、又他の技術者に於てもそうなのですが、正義と畏敬とをも亦そう云う風に人々の中に施設しましょうか、それとも所有^{あらず}する人々に頒ちましょうか。』するとゼウスは命じて曰った、『総ての者どもに互³つて、そして所有^{あらず}する人々が其を俱有する^{*}ように。さもなければ都市は成立しない、よし少数者のみが、他の諸術に於ける如くに、其を俱有していたところで、更に吾が名に於て、畏敬と正義とを俱有し得ざる者は、都市の病として、之を殺す、と云う法律を置け。』

おろくクラテス、此通りなのである、そこで此事に由つて、他の人々も、またアテナイの人々も、建築或は他の技芸の徳に関して議する場合には、少数者が其会議に与るべきであると思考している、従つて其少数者以外の何人かゝ意見を陳べようとしたならば、彼等は其を承知はしない、其

は君の言う通りであり、儂も亦其は当然だと主張する。然るに政治的徳に関する會議に進む場合には、其會議は全く正義の徳と思慮の徳とのみによつて運行すべきであつてみれば、彼等が如何なる人をも承認するのは当然である、其は何人も此徳を俱有しているのが当然であるからで、さなければ都市は成立し得まい。おゝソクラテス、是が其理由なのである。

しかし實際に於て総ての人が、所有あらずする人々は正義及び他の政治的徳を俱有している、と考えていることについて、君が偽られたと思わないように、次の事をまた其証明として見給え。他の諸徳に於ては君の言う通り、若し誰かゞ、自分がそうでもないのに、善い笛吹きであるとか、他の何等かの術に於ても亦そう言つたとしたら、人々は嘲笑したり憤慨したりする、又親身の者どもは彼の処に行つて、気が狂つてゐる者の如くたじなに窘める。ところが正義や他の政治的徳に於ては、よし人々が或者の不正であることを知つていても、而も若し其者自身が多くの人々の前で、自己の不利をも顧ず、真実を語つたとしたら、先の場合では真実を語ることが思慮の徳であると人々は考へているのに、此場合では其を以て狂気とする、そして人々は、實際の如何に拘らず、総ての人は自らは正義であると言わねばならない、又そう装わぬ者は狂気しているのである、と称している、云わば何人と雖も何等かの風に其徳を俱有していない者は無いと云うことが必然であ

つて、さもない者は人間の仲間には這入れないと云うように。

▲さて是を要するに、所有る人々を其徳に關しての議員として人々が承認しているのは当然である、なぜかと云えば人々は、総ての人が其徳を俱有していると考えているからである、其事を儼は今述べた。しかし其徳は生付うまれつきに有るのでもなければ、独り手に来るのでもない、むしろ教えられ得るものであり、又世話によつて来る者には来るのである、と人々は考えている、此事を次に君に証明してみよう。さて人々は、互が自然に又は偶然に持つていると考へてゐる限りの悪い事については、何人と雖も其を持つてゐる者どもを、そう云う者でなくする爲に、或は怒つたり、或は窘たしなめたり、或は教えたり、或は懲らしたりするものではない、むしろ人々は氣の毒に思う。例えば醜い者、矮小なる者、虚弱なる者に対して、如上の事の中の何れかの一事をしようと試みる程、理の分らない者が有り得ようか。なぜかと云えば、儼の思うに、此等の事は自然に又は偶然に人々に來たるものであると云うことを人々は知つてゐるからである、つまり美しい事や又其反対なる事は。ところが世話や練習や教育によつて人々が持つ限りの善い事に於ては、若し人が其を持つてゐないで、むしろ其反対である悪い事を持つてゐると、其人々に対して怒りや窘めが起るのである。不正や不敬虔の行爲やは其惡の一であり、つまり一括して云えば政治的徳に反対

なるもの一切が其である。其場合には誰でもが誰でもを怒り又窘める、それは世話と学習とによつて徳は獲られるものであると云う理由によるのは明かである。そこで若し君が、不正なる人々を懲らすと云う事がどう云う意味のものであるか、と云うことを思念してみさえすれば、ソクラテス、其事自体が君に、少くも人々は徳を付与し得るものであると思考していることを、教示するに相違ない。と云うのは、誰も不正なる人々を懲らすに当つて、彼等が悪い事をしたからと云う事を念頭に置いて、其故に懲らすのではない、苟くも、まるで野獸のように、道理も無く復讐的に呵責するが如き者でさえないならば。さて道理を弁えて懲らすことを試る者は既に過ぎ去つた不正事の故に呵責はしない——なぜかと云えば少くも為された事を未だ起らざる状態にしようとすることはできまい——むしろ将来の為にである、つまり其者自身は再び、又其者が、懲らされるのを見て他の者どもも、不正を行わないように。而もかゝる思慮を持つてゐる以上、其人は徳を教育され得るものであると思惟している、そこで向きを転ずる為に懲らすのである。さて総ての個人的にでも社会的にでも責罰を試る程の人々は、皆此信念を持つてゐる。そこで君の市民アテナイの人々は勿論、又他の人々も、不正を行つてゐると彼等が思う所の者どもを責めもし懲らしもする、其に何も相違はない。要するに此道理に基づいて、アテナイの人々も、徳は付

与され、教えられ得るものである、と思考している人々の中に這入っている訳である。これで君の市民達は、鍛冶工や靴工が政治的の事柄に関して意見を述べたとしても、其を承認しているのは当然であり、且徳は教えられ付与され得るものである、と思考していると云うことが、君に証明されたのである、おゝソクラテス、而も充分に、少くも儂にはそう見える。

▲^{十四}さて猶茲に疑問が残っている、其は君が善い人々について解釈の途に窮している事である、即ちどうして善い人々は、教師達から得られる事柄については、自分の子供を教育して智者にするが、彼等が自身善である所以の徳については、特に人よりより善き者に仕立てないのであるか、此事について、おゝソクラテス、詩話はもうよして、理実を君に儂は語ろう。まず次の事を思念して見たまえ。一体或一つの者が有るか無いか、其を市民たる者は誰でも必ず俱有する要があるような、苟くも都市が成立し得る為には。此点に於てのみ君には当惑している其疑問が解かれ得るので、他の点に於ては絶対に解けないのである。さて若し其が有るならば、其一者は建築の徳でもなく、製陶製靴の徳でもない、其は正義の徳、思慮の徳、敬虔であること、一括して一つなる其者を儂は男子の徳と呼びなしているが――若し其が是の如きものならば、つまり其を総ての者は俱有していなければならぬ、又其と俱に^{とも}総ての人は、若し何か他の事を学び或は行おうと

欲するにしても、是の如くに（即ち其と俱に）行わねばならず、又其を欠いては、行つてはならない、又其を俱有していない者が有れば、子供たると男子たると女子たるとを問わず、懲らされてより善く成るまで、彼等を教育もし又懲らしもしなければならぬ、しかし懲らされ教育されても聴き入れない者が有つた場合には、其者は医し得ない者として、之を都市の外に追放するか或は殺さなければならぬ――さて若し事情是くの如くであるとして、また其徳はかゝる所性であるのに、善き人々が他の事柄については子供等を教育するが、其徳については教育しないとしたら、考えてもみたまえ、善い人々と云うのは如何にも不思議なことになるではないか。なぜかと云えば、個人的にも社会的にも其が教えられ得るものである、と彼等が思考していることは、既に我々が立証したのである、さて其が教えられ又面倒を見られ得るものであるのに、他の事柄については子供を教導する、しかしよし彼等が其知識を持たないとしたところで、其に対して刑罰が死と云う訳ではない、然るに若し彼等の子供等が徳を学びもせず、其に向つて面倒もみられなかつた場合には、其子供にとつて其刑罰は死か追放かである、いや死に加えて財産の没収更に所謂一家の破滅である、其徳については教導もせず、又所有する手段を尽して面倒も見ないと云う事が有り得ることだろうか。おゝソクラテス、我々は其を信じない訳にはゆくまい。

▲^{十五}實際彼等は其子供を、極く幼少なる時から始めて、彼等の生きてゐる限り、教育もし矯正もしているのである。さて子供が漸く人々の話す言葉を解するようになると、乳母や母、又パイダゴ¹ーゴスや其父自身も、其子が最も善く成るようにと骨を折る、そして事毎に又口をきく度に教へ導いて、是は正しい、是は正しくない、是は美しい事である、是は醜い事である、是は敬虔、是は不敬虔、是は為^なせ、是は為^するな、と云うことを明かに指示してやる。そこで素直に服従すればよし、さもなければ、まるで振くれ曲つた材木を直くするように、威嚇や打擲^{ちようちやく}を以て之を直す。是に次いで彼等は教師達の許に子供を送つて、国文やキタリス樂よりは寧ろ子供の良き躰の為に特に面倒をみるように頼み込むのである。そこで教師達は其面倒をみる、而も其上にも子供が文字を学び、其文字を、今迄耳で音を解して來たと同様に、読知するようになると、机の上へ善い詩人達の詩を彼等にあてがって読ませ、之を暗記せしめる、其詩の中には多くの訓戒が含まれてゐる、また善き勇ましき人々についての描写、讚美、称揚が極めて多い、それは其子供が憧憬^{しょうけい}の心を起して模倣し、かゝる人物に成らうと意志するように、との趣旨からである。さて又キタリス音楽教師も他の方法を以てかゝる教育をする、つまり若い者どもが何等悪い事を行わないようにと、思慮の徳について面倒を見る、そこで彼等に、彼等がキタリスを弾くことを学ぶと、ま

た他の善い詩人即ち抒情詩人の歌を、キタリスの符曲に編んで教え、以て旋律と調和とが子供の魂に宿るように強いる、それは彼等が一層開化した人々と成り、より良き旋律と、より良き調和とを体得して、語ることに為すことに善能なる人物と成るようになる為である、なぜかと云えば、人の生活はつねに良き旋律と良き調和とを要するからである。更には等のかたわら彼等は其子供を体育教師の許に送る、それは子供等がより善き肉体を持つことによつて、善能なる精神に自己を捧げ得るようにし、戦争其他の行動に際して肉体の虚弱の故に怠けるようにせしめられないのである。而も特に此教育を為し得る程の者は特にも之に力を入れる——つまり資産の有る者どもが特にも為し得るのである——そこで彼等の子供等は、若い時から始めて、極く早くから教師の許に通い、極く早く教師達から離れるのである。さて彼等が教師達から離れると、今度は都市が彼等に法律を学び、其に従つて、つまり彼等が其から離れて勝手な行動を取らないように、其条文に従つて生きるように迫る、そこで別に術もなく、恰も国文教師が、子供等の中でまだ書くことのできない者どもには、筆を取つて文字の手本を書いて、之を彼等に与え、其字形の指導に従つて臨書せしめるように、そう云う風に都市も亦善き古えの立法家達の発見した其法文を手本として掲書し、其に従つて支配し又支配されることを強い、其法外に歩み出る者を懲戒する。此懲

戒の名称を君等の処でも、又他の到る処でも、処罰（正義）は直くするものであるから、「正す」と呼んでいる。さて個人的にも社会的にも是の如き配慮が徳について有るのであるが、おゝソクラテス、其でも君は、徳が教えられ得るものであると云うことを、不思議に思ったり、疑問にしたりしているのか。しかし驚くには当たらない、反つて若し教えられ得ないものであるとしたら、其方が余程不思議である。

▲然らば如何なる理由によつて善き父達から劣つた子供が出来るのであるか、其を今度は学びたまえ。儂は今し方此事柄、即ち徳は、都市が存立すべき条件として、何人も其を知らない素人であつてはならない、と云うことを真実として語つたが、別に驚くには当たらない。そこで儂の言うことが事実であるか——いや全くは其通りなのであるが——其を他の何等かの職業か学課かを選んで思慮してみたまえ。若し総ての人が各自でき得る限りの程度に於て笛吹きでなかつたならば、都市が存立し得ないとして、其場合には個人的にも社会的にも総ての人は総ての人に此事を教えもし、又美しく笛を吹かない者をば打擲しよう、更に又誰も此事を教えることを齎（おし）みはしまい、それは丁度今の場合何人も正義なる事、合法的なる事を、他の諸々の術智に於けるように、齎んで控えたり匿（かく）したりしないように——なぜかと云えば、儂の思うに、互に持つてゐる正義等の徳

は我々相互に役立つからであつて、其故に総ての人は総ての人に好んで正義や合法的なる事を告げもし教えもするのである。そこで若しそう云う風に吹笛に於ても我々が互に教え合うことに熱心と奮み拒まない心とを持つていたとすれば、おゝソクラテス、君は恐らく善い笛吹きの子供等は、劣つた者どものよりは、善い笛吹きに成ると思うであらう。しかし儼はそうは思わない、むしろ誰の子でも吹笛に好適なる天性を持つて生れゝば、其者は榮え、名高い者と成り、其天性を欠いていれば、別に彰^{あは}れない、そこで善い笛吹きの子に悪いのが出来たり、悪いのから優れたのが生れると云うことも屡々ある。しかし所有る人々は、素人で何も吹笛について知らない者どもに對比すれば、有能なる笛吹きではないか。そこで今の場合でも君はこう考えなければならぬ、法律を持つた人々の間に育てられた者どもの中で最も不正であると君に見える者でも、若し教育も裁判所も法律も又所有る方法を以て徳の配慮を迫る何等の強制も之を持つていない人々、云わば去年詩人ペレクラテスがレーナイオン¹に於て上演した人物の様な「野生人」、そう云う人々に比較して判断しなければならぬとすれば、彼は正しい且其事についての玄人である。いや全くのこと、若し君があのコロスの中の間人嫌いどもの様な人々の間に生れて、エウリバトスやプリノンダス²に遭つたとしたら、其悦びはどんなであらう、そして此土地の人々中での劣悪をすら望

み慕つて、悲しみ欺くに相違あるまい。しかし現に君は贅沢を言っているんだ、ソクラテス、総ての人々が各自で得る限りに於て徳の教師である為に、それで誰もが君に其とは見えないのだから。喩えば、若し君がヘラス詩の教師をなす探ねたとして、一人も其らしいのが見当らないようなものである。又若し君が手芸家の息子に其技芸を教え得る程の者を求めたとしたら——而も其技芸を其息子は其父からは勿論学んだし、其父も又其父の友人で同業の者どもで得る限りの力を其息子の教育に入れてある——そう云う息子どもを教え得るような人を探ね出そうとするならば、儂の思うに、決して容易ではない、おゝソクラテス、彼等の教師を見つけるとなると、しかし経験の無い者どもを求めることは極めて容易である。徳をはじめ他の所有する事に於ても亦其通りだ。ところが若しも茲に徳に推し進める点に於て我々より僅かばかりでも優れている者があるとすれば、其人こそ歓迎される訳である。さて儂はかゝる人々の一員であると自ら信じている、而も他の人々とは其趣を異にして、特に人々が美且善に向うことを助成するのである、其も儂の要求している報酬の高に正当して、いや更に多くの高を弟子は至当として払うのである。是に由つて儂は報酬を要求する方法を次の様になっている、つまり誰でも儂から学んだ場合、儂の要求するだけの銀を払うもよし、また其が心に反するならば、神殿に行つて、自ら其学識の値打を評価

して其高を誓い、其だけの額を置いてゆくも、任意にしてあるのである。おゝソクラテス、儂が詩話と理実とを以て君に語ったことは此様なことである、即ち徳は教えられ得るものであつて、アテナイの人々も其を信じている、更に善い父から悪い息子が、悪い父から善い息子が出来るのは別に驚くには当たらない、此等の事である。そこで又此処に居る此パラロスやクサンチポスの同輩であるポリクレイトスの息子達は父には全く不肖な子である、又其他の芸術家の子供等にしたところがそうである。しかし此事を誹謗するのは此処にいる此人達に対しては決して正当ではない、なぜかと云えば彼等の上には猶幾多の希望を我々は持つことができる、まだ若いのだから。

▲プロタゴラスは是程の此様な講演をして、説明を終った。ところが儂は永い間魅せられていたので、まだ何か談すのだろうと、彼の方に見入っていた、聴きたかつたものだから。しかし彼が実際にやめたのに気付いたので、やつと儂自身に帰えり、つまり我自身を引き緊め、ヒポクラテスの方を向いて曰つた

おゝアポドロスの息子よ、儂は君が儂を此処へ来るように仕向けたことについて君に感謝する、なぜかと云えば儂は、儂が現に此プロタゴラスから聴いた、此事柄を聴き得たことに多大の価値を認めているからだ、それと云うのも儂は今日迄善い人々が善い人々に成るのは人間的配慮

によるのではないと思考していたのだが、しかし今は其を信ずるに到つた。ところが極く瑣細な事だが、僕の了解を礙さまたげているものがある、だが其をプロタゴラスが易々として教授してくれることは極めて明かである、あれ程多くの事をすら教授してくれたんだから。ところが若しも此様な事柄について民衆演説家の誰なりと一緒になると、恐らくペリクレスからでも、又語るに有能なる人々であれば、他の誰からでも、此種の演説は之を聴けよう、がしかし若し其人に何事かを尋ねると、まるで書物と同様に、答えることも又自分で問うこともできない、むしろ若し誰かが演説中の何か瑣細な事でも其を質問してみたことか、まるで銅器が打たれて大きく反響し、人が其を押えるまでは鳴り続けるように、演説家も亦其と同様に、小さな事を問われても、演説の競走場をすつ飛ぶものだ。然るに此プロタゴラスは、現に証する通り、長い且美しい言葉を語る能力も充分に持つてはいるが、また問われた場合には、短く答え、又自ら問う場合には、其答を暫く待つて其を聴き納めると云うこともできる、而も此能力は唯少数者にのみ賦与されているのである。

さて、おゝプロタゴラス、私には或瑣細な事が欠けています、そこで若し次の事を貴方が私に答えてさえくれれば、全体を持つことができるのです。貴方は徳が教えられ得るものであると言

われましたが、私は、苟くも人々の中の他の何人かに従つて信ずるものなら、勿論貴方に従いましょう。しかし貴方の言われたことで私の不審に思っていること、其事を私の魂の中に補つてください。貴方はゼウスが正義の徳と畏敬とを人々に送つたと言われ、而もまた演説中処々で、正義の徳に思慮の徳に敬虔に更に其等一切、云わば一括して或一者、即ち徳、と云うことが貴方によつて説かれましたが、其事を私に一層正確に、理論を以て、詳説してください。一徳は或一者であつて、其部分が正義の徳や思慮の徳や敬虔やであるのですか、それとも私の今呼び挙げた其等の所有する名称は、一者である其同じ者の（異なる）名称なのですか。私が猶望み求めていることは即ち此事なのです。

▲^大おくソクラテス、其に答える位は極めて容易なことさ、つまり徳は一つであつて、君の問うている其等は其部分である。

では其部分は、顔の部分即ち口や鼻や眼や耳のような部分なのですか、それとも金の部分の様に、一が他より、互からも、又全体からも、大小以外に於ては、ちつとも違つたところがないようなのでしょうか。

前の方のように儼には見える、ソクラテス、つまり其は顔の部分が顔の全体に対する関係と同

様である。

では人々が其徳の部分を得するに、或者は或部分を持ち、或者は他の部分をでしようか、それとも誰でも其一を得れば、必然に一切を持つものでしようか。

決してそんな事はない、なぜかと云えば、多くの人々は勇敢ではあるが不正であり、又正しい者でも智でない者があるから。

すると其等も亦徳の部分なのでしようね、智慧も勇敢も¹。

無論そうさ、而も智慧は部分の中でも最も大なるものである。

では其等の各々は夫々互に他なのですか。

そうだ。

すると其等の各々は独自の能力を持っているのでしよう、云わば顔の諸部分に於て、眼は耳の如くではなく、其能力も同一ではない、又他の何れもが、其能力に於ても又他の点に於ても、他の如くではないと同様に。そこで徳の部分も亦其様に、他が他の如くではないのですね、其自体に於ても又其能力に於ても。若し其例に比して見れば、勿論そうではありませんか。

おゝソクラテス、其通りである。

すると徳の部分あ中の或者は或は知識、或は正義、或は勇敢、或は思慮、或は敬虔の如くでない他の者であることになりましょう。

彼は之を肯定した。そこで僕は曰つた

さあどうです。我々は共同して、其等の各々はどんなものであるか、を考察しようぢやありませんか、そして先ず次の様なことから始めましょう。正義は或事柄であるか、ないか。私には或事柄であると思われませんが、貴方にはどうですか。

儂にも。

ではどうですか。若し誰かゞ私と貴方とに、『おゝプロタゴラスにソクラテス、兩人して私に言つてくれ、君等が今呼称した其事柄、即ち正義、其事は正しいことであるか、不正なことであるか。』と言つたら、私は彼に、正しいことだ、と答えますが、貴方はどっちへ投票しますか、私と同じですか、或は反対ですか。

同じである。

従つて正義の徳は、正義で有ると云うこと、と同じ事である、私は其質問者にこう答えて言いますが、貴方もそうでしょう。

そう。

若し彼が其次に、『さてそれでは敬虔なる者が有ると君等は言うのか。』と我々にきいたなら、私の思うに、我々は其を肯定するに相違ないでしょう。

そう。

『では君等は其を或事柄であると主張するのだね。』と言つたら、我々は肯定したものでしょうか、どうでしょう。

彼は其を肯定することに同意した。

『では其事柄を君等は、敬虔で無いと云うこと、と同じ所性のものであると云うのか、それとも、敬虔で有ると云うこと、と同じであると言うのか』此質問に対して少くも私は不備の情を禁じ得ない、そして言つてやるでしょう、『氣を付けて口をききたまえよ、君、若しも敬虔其自体が敬虔で無いとしたら、他に何ものか、敬虔であるなどと言えまいぢやないか。』と。そこで貴方はどうです、貴方もそうは答えませんか。

全く其通りだ。

▲^{十九}さて若し其次に其人が我々に問うて、『少し前に君等はどう言つたか。私は一体正しく君等か

らぎいたのだろうか。徳の諸部分は相互に、一が他の如くでない様な状態にあるものである、と君等は言つたように私には思われたが。』と曰つたら、少くも私だけはどう答えましょう、『外のこととは正しく君は聴いているが、僕が其事を言つたと思うのは、其は聴き違いである、なぜかと云えば、此プロタゴラスがそう答えたので、僕は其を聴いただけである。』と。そこで若し彼が、『おゝプロタゴラス、此人は眞実を言っているのですか、貴方が言つたのですか、徳の各部分は他の部分の如くではないと。此主張は貴方の主張なのですか。』ときいたなら、何と其人に貴方は答えますか。

おゝソクラテス、其を承認するものは必然である。

其を承認した上で、さて、おゝプロタゴラス、何と彼に答えたものでしょう我々は、若し彼が、『従つて敬虔は、正義で有るが如き事柄ではないのか、又正義は、敬虔で有るが如きではなくて、むしろ非敬虔で有ると云うが如きであるのか、敬虔はまた、正義で有るが如きではなくて、むしろ不正で有ると云うが如き事であり、正義は、不敬虔で有ると云うことと同じ事であるのか。』ときいたとしたら。さて我々は彼に何と答えたものでしょう。と云うのも、私としては自身、少くも私自身の為には、正義は敬虔であり、敬虔は正義であると言いたいのです、そして若しも貴方

が私に許してくれるならば、貴方の為にも亦同じ事を私は答えて、正義と敬虔とは同一であるか、或は最も相似である、そして一切の中特に正義は敬虔の如く、敬虔は正義の如くである、と言いたいのです。そこで考えてみてください、貴方はそう答えることを拒みますか、それとも貴方にも亦そうと頷かれますか。

おゝソクラテス、儼にはそう単純であるとは思われない、正義が敬虔であり敬虔が正義であると言ふことに同意のできる程には。寧ろそこには或相違があると儼には思われる、しかし其がどれ程影響するか、若し君が欲するならば、我々にとつて正義は敬虔で、敬虔は正義であるとしよう。そこで僕は曰つたのさ

何んてこつてす、私は決して「若し君が欲するならば」とか、「若し君に思われるならば」と云う其事が吟味されることを望んでいやしません、むしろ私と貴方とが（吟味されることを）です。此「我と汝と」之を私が主張するのは、つまりそうやって、若しも人が此「若し」を其から取り去つてしまえば、其主張が最も善く吟味されると信じているからです。

だがしかし正義は敬虔に似ているさ、なぜかと云えば、どんなものでも、どんなものただつて幾分か似ているぢやないか。白だつて黒に、又堅は軟に少しは似ているし、まるつきり互に反対

であると思われる他のものだつてそうだ。又先に他の能力を持つていて、一が他の如くではないと言つた顔の部分にしたところで、多少は似ている、そして他は他の如くである。そこで少くも此方式を以てすれば、一切万有は相互に似ていると云うことを、君の意志次第では、君が証明もなし得る訳だ。しかし或似た点を持つているからと言つて、其等を似ていると呼ぶのは正当ではない、或不似な点を持つてゐるものを不似と言うことだつて、苟くも其似た点が極めて小さなものである場合には。

そこで僕は驚いて、彼に向つて曰つた

それでは貴方によると、正義と敬虔とは相互にそう云う状態にある訳なんですか、つまり双方が互に小さな或似点を持つてゐるに過ぎないで。

いや全然そう云う風だと云う訳ぢやないが、そうかと云つて又君が信じてゐると儼に思われる程でもありやしないよ。

しかし貴方は是に対して不機嫌のように私には思われますから、是を我々はよしにして、貴方の説の中の、他の次の事を考察してみましよう。

▲^{二十}或ことを無思慮と呼びますか。

彼は肯定した。

此事柄に全然反対なるものは智慧でありましょう。

儂にはそう思われる。

人々が正しく且有益に行動するならば、其場合にかく行動する人々は深く思慮している、と貴方には思われますか、それとも其反対にですか。

深く思慮しているさ。

ところが思慮の徳によつて深く思慮しているのでしよう。

其は必然だ。

それでは正しくなく行動している者は思慮無く行動している、そしてかく行動している者は深く思慮していないのでしよう。

彼は僕に同意した。

従つて思慮無く行動するのは思慮深くとは反対でしよう。

彼は肯定した。

そこで思慮無く為されることは無思慮によつて、又思慮深く為されることは思慮の徳によつて

為されるのでしよう。

彼は之を承認した。

それでは或ことが強さによつて為されるならば、強く、又弱さによつてならば、弱く為される
のではありませんか。

彼にはそう思われた。

又或ことが速さと俱に、ならば、速く、又遅さと俱にならば、遅くでしよう。

彼は肯定した。

又若し同じく行はれるならば、同に因つて「行われ、又反対にならば、反対に因つて。

彼は同意した。そこで僕は更に曰つた

さあどうです、美なる者は有るでしよう。

彼は同意した。

其には醜以外に何か反対なるものが有りますか。

無い。

ではどうですか、善なる者は有るでしよう。

有る。

其には悪以外に何か反対が有りますか。

無い。

ではどうですか、音声には鋭音なる者が有りましょう。

彼は肯定した。

其には鈍音以外他に何等反対なるものは有りますまい。

彼は無いことを肯定した。

さてそこで、諸々の反対なるものの夫々の一つには、唯一つのみが反対であつて、多くのものがそうではありますまい。

彼は之に全く同意した。

さあどうです、我々是我々によつて承認された事柄を再び数え上げようぢやありませんか。我々は、一つものは唯一つに対してのみ反対であつて、多くには反対でない、と云うことに一致しましたね。

我々は一致した。

反対に為されることは反対に由つて為されると云うことにも。

彼は肯定した。

又我々は、思慮無く行われることは、思慮深く行われることとは反対に行われるのである、と云うことにも同意したでしょう。

彼は肯定した。

又思慮深く行われることは思慮の徳に因つて行われるのであり、又思慮無く行われることは無思慮に因つて、と云うことにも。

彼は同意した。

さて苟くも反対に為されるのであれば、反対に因つて為されるでしょう。

そう。

一方は思慮の徳に因つて、他方は無思慮に因つて行われるのですね。

そうだ。

反対に。

全く。

では互に反対なるものに因つて。

そうさ。

従つて無思慮は思慮の徳の反対なのでしょう。

明かにそうだ。

では記憶していますか、先の論で、無思慮は智慧の反対である、と云うことが我々によつて一致承認されたことを。

彼は頷いた。

一つは唯一つにのみ反対であることも。

儼は肯定する。

それぢや、おゝプロタゴラス、どつちの所説を我々は破壊したものでしょうか。一つが唯一つにのみ反対であると云う方をでしょうか、それとも其中に於て、智慧は思慮の徳とは別異なものである、但し各々徳の部分である、而も別異であると云う以上に、其自体も其能力も不似であること、猶顔の部分の如くである、と云うことが言われた其所説の方ですか。どつちを我々は破壊しましょうか、此所説は両方が真に音楽的には言われていないのですから、なぜかと云えば相

互に共鳴し調和してはいないではありませんか。苟くも一つに對して唯一つのみが反對であつて、多くにではないと云うことが必然であり、而も一つであり智慧に反對である無思慮が、また思慮の徳にも反對のように見える以上、一体何等かの風に両者は共鳴しているのでしょうか。しちやいますまい、おゝプロタゴラス、それとも何等か他の風に。

彼は不承々々に同意した。

では一つなんでしょう、思慮の徳と智慧とは。而も前には、正義の徳と敬虔とが殆ど同一である、と云うことも亦我々には明かにされています。さあどうです、おゝプロタゴラス、我々はへたばつてしまわないで、彼の残りをもち考査し尽してしまひましょう。抑々或不正を為している人は、為している不正について、深く思慮している、と貴方には思われますか。

おゝソクラテス、少くも儂は其に同意することを恥ぢる、人々の多くは其を肯定してはいるが。それでは彼等に向つて私は論してやりましょうか、それとも貴方に對しましょうか。

君に其意志が有るなら、其多勢の意見に對して問答したまえ。

私にはどつちでも別に変りはありません、唯貴方さえ、そう思われようが、思われまいが、答えてくれるなら。なぜかと云えば、私は特に其言われている内容を吟味するのだし、恐らく實際

は私が問う者、答える者となつて、研究してゆくことになるのですから。

▲^{二十一}するとプロタゴラスは最初我々に対して尊大振つていた——つまり此論法が不得意な且難渋なものであることに苦んでいたのだ——しかし驪^{やが}て答えることを承知した。そこで僕は曰つた

さあどうです、初つから私に答えてください。不正を行つてゐる人々は深く思慮してゐる、と貴方には思われますか。

そうでしょう。

深く思慮することを良く慮^{おもひ}ることであると貴方は解しますか。

彼は肯定した。

では良く慮るとは、彼等が為す不正事について、良く注意することであると。

そうでしょう。

其は一体不正を為してゐる者どもが良く行つてゐる（幸福）場合にですか、それとも悪く（不幸）ですか。

良くさ。

さて貴方は善なる者が有ると主張しますか。

主張する。

それでは人々にとって有益である事、其が善ではありませんか。

そうだ、ゼウス！　しかし人々にとつて有益でないものをだつて儂は善いものと呼んでいるよ。その時僕にはプロタゴラスが心を荒立て、喧嘩腰で、答えることに戦備をしたように思われた。僕は彼のそう云う情勢を見て取つたから、そこで氣を付けて静かにきいた

おゝプロタゴラス、では人々の誰にも有益でないものをですか、或は全然有益でないものをですか。そう云うものをすら貴方は善と呼ばれますか。

そうは呼ばんさ、しかし少くも儂は人々にとつて有害なるものも、又有益なものも、例えば食物とか、飲料とか、薬とか、まだ外にいくらでも数知れぬ程沢山なものを知っている、更に人々にとつては利害がないが、馬にはあるもの、又牛にだけのももの、犬にだけのももの、又其等のものには何でもないが、植物には利害のあるもの、更に植物の根には善いが、芽には害になるもの、例えば肥糞は所有る植物の根の傍に撒かれれば善いものであるが、若し君が新芽や若い枝にでもふりかけようものなら、悉く枯らしてしまう、又オリブ抽は大抵の植物には最も害があり、人間以外の動物の毛には特に刺戟が強い、しかし人の毛髪や肉体の其他の部分には助益することの多

ものである。こんな風に善いものは種々雑多である、例えば今の例でも其油に人の肉体の外表面には善いが内部には其同じものが最も悪いのである、そこで此事によつて医者は誰でも病人に油を用ゆる事を禁ずる、たゞ食物の中へ極く少量だけを許す、しかし食物や飲料の中へ加える其分量は、鼻を通して来る感覚上の厭な感じを消し去るだけの程度に過ぎない。

▲^{二十一}彼が此事を語り終ると、そこに居た連中は、彼が良く語つたとばかり、動揺めいた。次いで僕は曰つた

おゝプロタゴラス、私は忘っぽい人間なのです、そこで若し人が私に長い談をすると、其談の主眼を忘れてしまうのです。さて若しも私が耳の遠い者だつたとして、貴方が我と会談しようとするならば、他の人々に対するよりも、もつと大きな声を出さなければなりません、其と同様に今貴方は忘っぽい人間にぶつかったのですから、私の為に答を切り詰めて、もつと短くしてください、苟くも私が貴方に追従してゆかねばならないのでしたら。

ではどう短く答えろと君は命ずるんだ、必要以上に短く君に答えろとも云うのか。決してそうではありません。

必要な程度でよいのか。

そうです。

それでは儂にとつて答えるに必要なだけの程度で君に答えればよいのか、それとも君にとつてか。

そこで僕は曰つた

私はこう云うことを聞いています、貴方は自身、思ひのまゝに同じ事について、全く言葉が切れない様に、そんなに長く語ることでもできれば、又誰も貴方より短く言うことができない程に、そんなに短く語ることでもでき、更に其事を他の人に教えることもできると云うことをです。そこで若し貴方が私と会談しようとするならば、私に対しても片方の方法即ち短言法を用いてください。

おゝソクラテス、儂は既に多くの人々と議論の競争場裡に立つた、しかし若し君の命ずることを為たら、つまり対論者が儂に命ずる其方法で談論したとすれば、儂は何人より優れては見えず、又プロタゴラスはヘラスの人々の間に名を為してはいなかつたろう。

そこで僕は――彼が以前の答えについて、自身自分に氣に入らなかつた、のみならず、敢て答えながら談すことに氣が向いていないのを知つたので――尚此交際場に出席しているのは僕の任務

でないと思考したので、曰った

それでは、おゝプロタゴラス、貴方の思いに反してまで、私は何でもかでも我々の此交際を続けたくはありません。しかし若し貴方が、私の付き随い得る様に、対談する意志を持つていられるなら、それならば私【一字欠】貴方と対談しましょう。なぜかと云えば、貴方は、貴方について言われている通り、又貴方が自身でも言われる通り、長言法でも、短言法でも、交際をすることが出来る——貴方は智者なのですから——ところが私には、よし私がそうありたいと望んでも、長く語る能力が無いのですから。そこで両方のできる貴方がむしろ我々に歩調を合わせるべきだったのです、そうすれば此交際は絶えなかつたでしょう。然るに今貴方は其を欲しないのであるし、又私には暇が無い——なぜかと云えば私は余所に行かなければならないのです——従つて長口舌を振る貴君の傍に留まることができないしするので、私は去ることにします、勿論貴方からあの色々なことを聴いていた間、とにかく非常に愉快だったので、

此事を言うと同時に僕は去ろうと立ち上つた。僕が立ち上ると、カリアスが、右の手で僕の手を捉え、左の手で此トリボンの端を掴んで、言うには

我々は貴君を去らしてなるものか、おゝソクラテス、若し貴君が出て行つてしまつたら、此談

論は我々によつては同じ様にゆかないにきまつてますから。そこで僕は貴君に我々の許に留まることを要請します。貴君とプロタゴラスとの対談を描いて、誰一人からも特に好んで聴きたくはありませんから。そこで我々皆を悦ばしてください。

そこで僕は――已に去ろうと立ち上つていたが――曰つた

おゝヒポニコスの子よ、いつも僕は君の愛智心²には感心している、現に今も僕は其を誉め又愛している、であるから若し君が僕にでき得ることを要請するのなら、それは悦ばしてもあげたいのだ、ところが今の情態は、之を喩えて言えば、君が僕に、僕の追従を強要しているヒメラの走者クリソンと、或は競走者や飛脚の誰とでもよいが、競走して附いて行け、と要求するとして、僕は君に、僕の方が君よりも一層僕自身に、走っている彼等に追従しろ、と迫っている、と言いたい有様なのである、しかし其は不可能である、むしろ若し君が同じ処を僕とクリソンとが走るのを観覧したいなら、其人に歩調を緩めることを請わねばならない、なぜかと云えば、僕には速く走ることができないが、其男は遅くもできるのだから。そこで若し今君が僕とプロタゴラスとを聴こうと欲するならば、此人に請うがよい、最初僕に短く問われた事に彼も亦短く答えたように、其通りにまた今も答えてくれと。もしそうしなければ、此談論に抑々どんな方式が有り得る

のか。なぜかと云えば、少くも僕は、互に對談して交際すると云うことと、對民衆的演説をする
と云うことと、そこには劃たる差別が有る、と思つていたのだから。

しかし、考えてごらんなさい、おゝソクラテス、プロタゴラスは、彼の望む通りに對談するこ
とが彼に許されてあることを、要求している、其は正当なことを主張していると思われまし、
又貴君が、貴君の欲する様にしよう、と云うとしても。

二十三
▲すると是を受けてアルキビアデスが曰つた

おゝカリ阿斯、君の言うことは美しくない。なぜかと云えば、此ソクラテスは、彼が長言法を
心得ていないと告白し、其点ではプロタゴラスに譲つてゐる、しかし對論ができ、解答を与え又
受け取ることを知識していると云うことを、彼が人々の中の何人かの手に委ねるとしたら、僕は
驚かざるを得ない。そこで若しプロタゴラスも亦、對論に於てはソクラテスに劣る者であること
を、承認するならば、ソクラテスはそれで満足するのさ。しかし若し對当にやろうとするなら、
問いつ答えつ對論したらよい、但し質問される度に長い言説をすつ飛ばし、文句を叩き出し、よ
つて解答を与えることを欲せず、むしろ聴いている者の多くが論の眼目を忘却してしまふまで、
引延さないようにしなければならぬ。だが苟くもソクラテスが忘れるなどと云うことはない、

是は僕が保証する、しかし串戯じようだんに忘つばい男だと言っているなら別だ。そこで僕にはソクラテスがいかにも当然なことを言っているように思われる。なぜかと云えば各自は自己自身の見解を鮮明に発表せねばならぬからである。

するとアルキビアデスの次に、僕の思うには、クリチアスが話し手であつた。

おゝプロヂコスにセピアス、カリアスは、私の思うに、プロタゴラスの方に与しているし、アルキビアデスはいつも、彼が何かに思い込むと、其方に加担する、しかし我々は絶対にソクラテスにもプロタゴラスにも味方に組んではならない、むしろ公平に、此交際を途中で破らない様に、両者に請わねばならない。

彼が此事を語ると、プロヂコス¹が曰つた

おゝクリチアス、君は美しく言つた、なぜかと云えば、かゝる談論の席に連つた者どもは、討論者の双方に対して公平の聴者であらねばならないが、平等のであつてはならない——其は同一義ではないから——なぜかと云えば、両者に公平に聴くことは必要であるが、各々に等しきを分つてはならない、むしろ智なる者にはより多きを、より無智なる者にはより少きを与えねばならないからである。我輩は自身、おゝプロタゴラスにソクラテス、君等が論題について互に戦うこ

とに同意するよう、君等に要請する、しかし諍うことに、とは願わない——なぜかと云えば、論戦は好意を以て味方が味方と試みるものであり、論諍は反目せる敵どもの互に行うところであるから——而もかくの如くにして我々に此交際は最も美しきものと成るであろう。そこで君等討論者は就中^{なかずく}かくの如く行動して我々聴者の間に名望^{めいぼう}を獲得するとも、称揚^{しょうやう}せらるゝな——なぜかと云えば、名望は聴者の魂の内に欺罔^{きもう}を欠きて存し、称揚は屢々自己の見解に違反して偽る者ども言葉の中に在るからである。又我々聴者は就中かくの如きに際して喜悅^{きえつ}を抱くとも、快樂^{らくたつ}を感じてはならない——なぜかと云えば、喜悅は事を学び、而して叡智を精神に俱得する者の抱くところであり、快樂は物を喰い、或は他の快を肉体に受くる者の感ずるところであるから。

▲^{二十四}此事をプロヂコスが語ると、そこに居た殆ど総ての者が感歎してしまった。

此プロヂコスの次に智者ヒピアスが語った

おゝ茲に列席の諸君、余の思考するに、諸君は同胞であり、親友であり、而して悉く皆市民である——自然^{しぜん}に於て、しかし法習^{ほふしゆ}に於てははない、なぜかと云えば、似たる者は似たる者に自然に於ては同族である、然るに法習は人々の暴君として、多くの事を自然に反して強制するからである——さて我々は事物の自然性を知っている、而してヘラスの人々の中最も智なる我々は、

此事によつて、今やヘラスの中なる智慧のプリタネイオン²に、此都市の此最も大なる、最も裕福なる邸宅に集合している、而も此尊嚴に値するが如く自らを示さず、むしろ人々の中に於て最も劣等なる者どもの如く互に争うことは、げに恥すべきことである。かくて余は茲に且請い、且勸めよう、おゝプロタゴラスにソクラテス、君等は相与に進みたまえ、我等は審判官となり、中庸に向つて一致するよう、君等を強制するによつて。そこで君は極端に短くすると云う対論の其型の嚴密を求めないがよい、其がプロタゴラスにとつて不愉快であるならば、むしろ談論の手綱を離しやり緩めたまえ、よつて其言説が我々にとつて一層高尚に且一層型麗しく見えるように。又プロタゴラスは帆の有らん限りを張拡し追手を孕み、陸地を見失う迄に言説の大海原に逃れ去ることを避けられよ、むしろ兩人とも中間に其進路を取つたらよからう。さて君等はかくの如くを試みたまえ、而して君等各自の言説を其中庸の長さに看守すべき審判官、監督官、仲裁者を選ぶよう、余の意見に服従しては如何。

二十五 ▲此演説はそこに居る人々の喜び迎えるところであつた、そして皆其を褒め挙げた、又あのカリ阿斯は僕の去ることを許さないし、皆して僕に監督者を選ぶことを強要した。そこで僕は曰つた

恥辱ぢやないか、討論の審判者を選ぶと云うのは。抑々若し選ばれた者が我々より劣つた者であつたら、劣つた者が優れた者どもを監督すると云うことは正当ではない、若し又同程度の者なら、是亦正当ではない、なぜかと云えば似たる者は我々と似たる事をする、従つて其者は余分に選ばれたことになるではないか。そこで我々より優れた者を君等は選ばねばならない。實際に於て、僕の思うに、其は君等にはできないことだ、此プロタゴラスより以上の智者を誰か選ぶ必要があるんだから。しかし若し君等が一向より善くない者を誰か選んで、而もそうだと主張するなら、其は此人にとつて、云わば彼を劣つた者として其監督者を選ぶのであるから、侮辱となるではないか、但し僕には別に何の変りもない。だが君等の希望している此交際及び討論を我々が続ける為に、僕はこうしようと思う。若し此プロタゴラスが答えることを欲しないなら、此人が質問して、僕が答えることにしよう、しかし其場合に僕は彼に、僕の主張するところ、つまりどう云う風に答を答えなければならぬか、其を示すように試みる、そこで此人が質問しようと思うだけの事に僕が答えてしまったなら、今度は又此人が同じ様に僕に解答を与えなければならぬ。しかし若し彼が其問に対して答える事に気が進まないように思われたら、僕も君等も共同して、此交際を破壊するな、と、君等が此僕にしたと同じことを、彼に要求しよう。そこで此事の為に

は誰か一人が監督者となる必要はない、むしろ皆が共同して監視しなければならない。

茲にそうすべきであると皆の考えは一致した。またプロタゴラスは特に望んでもいなかったが、
而も猶問うこと及び、彼が存分に問うた後には、今度はまた短く答えて、解答を与えることをも
承認するようにさせられてしまった。

▲^{二十六}そこで彼はこんな風に質問を開始した

おゝソクラテス、儂の思考するに、人間にとつて其教育の最も重大なる部分は詩について畏るべき者であることである、即ち詩人達によつて言われたことについて、其が正しく歌われているか否かを了知し、其を解説するの知識を持ち、又問われたる場合には解答を与えることができるとうことである。さて然るに今は其論題は同一の事柄でなくてはならない、君と儂とが今語り合っている其事、つまり徳についてあることを要する、しかし其が詩の上に移されるので、唯其だけの相違がある訳だ。さてシモニデスはテタリアのクレオン¹の息子のスコパスに向つてこう云つた――

真実に 善き人に 成る のが 困難なれ、

手に足に心にぞ格しき、咎無く作られたる者に。

此歌を君は知っているか、それとも全体を言つて聴かそうか。

そこで僕は曰つた

それには及びません、知っていますから。その上私は其歌を随分研究したことがあります。それは感心だ。それでは此歌が美しく且正しく作られてあると君には思われるか、どうか。全く美しくも亦正しく。

しかし若し其詩人が自身、自分に反対したことを言つているとしたら、君には其が美しく作られてあると思われるか。

それは美しくありません。

もつと良く注意して見たまえ。

しかし、貴方、私は充分考察してあるんです。

では君は知っているね、此歌が進んでから、彼がこう言っているのを――

我々にピタコス²の句は至当には告げられてあらず、

よし智者の言葉なりとも、曰く、勝れて有るは困難、と。

君は知っているか、比同一人が此事を言つたのを、先の事と一緒に。

知っています。

では此事が前の事によく相応していると君には思われるか。

少くも私にはそう見えます。同時に僕は彼が何か本当のことを言っているのではないかと懸念したので、更に言葉を継いだ。しかし貴方にはそう見えないのですか。

どうして此両方を語った彼が自己に一致していると見えようか。彼は最初に自分で、善き人になるのは困難である真実に於て、と前提して、而も其詩を僅かばかり先に進むと、其を忘れてしまい、ピタコスが彼と同じ事、即ち勝れたる者であるのは困難、と言ったのに、彼を非難して、彼自身と同じ事を言っている其彼を承認しないと主張しているのである。しかし自分と同じ事を言う者を非難する場合には、勿論自分自身を非難しているのではないか。そこで前者か後者かどっちかを正しく彼は言っていないことになる。

彼は此事を語つて、多くの聴衆をして喧囂けんじょう、称歎せしめた。僕は初め、まるで優れた拳闘家に殴られたように、彼が其を語り、他の人々が囁ささやし立てた時には、眼が瞑みんで、眩くらがしてしまった。そこで――まず君に正直なことを言えば、其詩人が何を言っているのか、其を考察する余裕を得る為に――プロヂコスの方を向いた、そして彼を呼んで曰つた

おゝプロヂコス、シモニデスは貴君の市民です、そこであの人に貴君は加勢する義務がある。私は貴君を助けに呼び寄せたいと思うのです、丁度ホメロス³が、スカマンドロスがアキレスに包圍された時にシモエイスを救助に呼んだ話をして、歌つたように

我が親しき同胞よ、我等兩人して此勇士の力をば
抑えよう。

しかし私は貴君を呼び寄せたい、此プロタゴラスが我々に対してシモニデスを打ち摧くといけな
いから。なぜかと云えば今はシモニデスの為に貴君の文学的知識による訂正を必要としているの
ですから――何しろ其知識によつて貴君は欲すと志すとや、又現に貴君の説いた多くの美しい
ことについて、其等は同一義ではない、と区別を立て得るのですから。さてそこで貴君は私と同
様に思っているかどうかを考察してください、と云うのはシモニデスは自身、自分に反対なるこ
とを言っているとは見えないからです。おゝプロヂコス、貴君は一つ貴君の意見を前以つて明し
てください、貴君には成ると有るとは同一であると思われませんか、それとも互に異つていまし
ようか。

するとプロヂコスは曰つた

異つてゐるとも、ゼウス！

そこで僕は曰つた

最初の詩句では、シモニデス自身が自分の意見を明かに述べて、善き人に真実に於ては成るのが困難である、と言つたのでしよう。

するとプロヂコスが曰つた

君の言うことは尤だ。

そこで僕は曰つた

してみると、彼がピタコスを非難したのは、プロタゴラスが思つてゐるように、自分と同じことを言つてゐるからではなくて、異つてゐる為にある。なぜかと云えば、ピタコスは、勝れたる者に成るのは困難、とは言つていない、有るのは、と言つたのであるから。おゝプロタゴラス、此プロヂコスが言つてゐる通り、有ると成るとは決して同一ではありません、そこで若し有ると成るとが同一でないならば、シモニデスは自身、自分に反対な事を言つた訳ではありません。真に恐らく此プロヂコスをはじめ他の多くの人々は、ヘシオドスに従つて、こう言うでしょう、「善き者と成るのは困難である——徳の前に神々は汗を置いたが故に、しかし若し人が其の頂きに到

つた場合には――其を所有するに――よし困難なるものであつたにせよ、其後はいとゞ容易なるものである、^五」と。

^{二十七}▲プロヂコス此事を聴いて僕を称揚した。ところがプロタゴラスの言うには

君の其訂正は、ソクラテス、君が訂正しようとした其事柄より更に大きな誤認を持つている。
そこで僕は曰つた

すると私は下手な細工をした訳ですね、おゝプロタゴラス、つまり私は可笑しな医者なのです、
癒そうとして其病氣を一層悪くするなんて。

その通りだ。

どんな風にですか。

殆ど君は此詩人について学んだ所が無いではないか、若し其通りであつて、徳を所有すること
が何か劣つたこと^一でもあるように、彼が思っているとするなら。しかし其事は所有する事柄の中
で最も困難なことなのだ、誰だつてそう思わぬ者はあるまい。

そこで僕は曰つた

ゼウス！都合のよい時も時、我々の此対論の席に此プロヂコスが居合わせてくれた。なぜかと

云えば、おゝプロタゴラス、プロヂコスの智慧、其は神的なものです、古くから有ったので、シモニデスに始つたには相違ないが、或は一層古いものであるらしい。貴方は他の多くの事柄には経験が深い、此事には全く無経験であるように見えます、私が此プロヂコスの弟子であることによつて識っているような訳にはゆきません。そこで今も「困難」と云う言葉をシモニデスは、貴方が解していると等しい意味には、解していなかったことを、貴方は学んでいないように私には思われます。例えば「畏るべき」と云うことについても、「」此プロヂコスは、若し私が貴方や他の人を誉めて、プロタゴラスは智なる畏るべき人である、と言う度毎に、いつも私に警告し教えて、私が善いことを畏るべきことと呼ぶのを恥とは思わないか、と問責するのです。そして言うには、『なぜかと云えば、畏るべきとは悪いと云うことであるから。そこで人は誰でも又どんな場合でも「畏るべき富」とか「畏るべき平和」とか「畏るべき健康」とは決して言わない、むしろ「畏るべき病」とか「畏るべき戦争」とか「畏るべき貧」とは言う、其はつまり畏るべきものは悪いものだからだ。』と。同様に「困難」と云うことも亦ケオスの人々は、シモニデスも、悪いこととして取っているか、或は他の意味に解しているので、其を貴方は学んでいないのです。そこで我々はプロヂコスにききましょう、シモニデスの方言を此人に問うのは正当ですから。お

プロヂコス、どう云う意味にシモニデスは此「困難」を解したのですか。

悪いと云う意味にさ。

すると此事に由つて、おゝプロヂコス、彼はピタコスが、勝れて有るは困難、と曰つたのを非難したのですね、つまり彼が、勝れて有るは悪い、と言つたように聴いたので。

するとプロタゴラスが曰つた

しかし、おゝソクラテス、君は、シモニデスが唯其だけを意味に解し、而もピタコスを、彼がレスボスの者で、従つて粗野な方言の間に育つた為に、言語を正しく使い分けることを知らなかつたと云うことで、侮辱したのだ、と思つてゐるのか。

おゝプロタゴラス、貴方は現に此プロヂコスの言を聴いた筈です。之に反対して貴方は何か主張することが出来ますか。

おゝプロヂコス、そんな訳のことぢやない。僕は良く知つてゐるのだ、シモニデスだつて「困難」と云うことを、我々他の人々が其を悪いと云うことではなく、むしろ容易でない、つまり多くの障礙しょうがいを通じて成就することとして使つてゐる、其意味に解してゐたのである。

そこで僕は曰つた

私だつて、おゝプロタゴラス、シモニデスは其意味に解しているのだと思つています、又此プロヂコスも其は知つているのですが、ちよつと串戯じやうだんを言つて、貴方が自分自身の説に加勢ができるかどうか、貴方を試して見ようと思つたのでしよう。なぜかと云えば、シモニデスが「困難」を「悪い」と解さなかつたことは、直ぐ其次の句が立派に証拠立てていますから。³彼は言つています

神のみ独り是を持つべし、賞として。

しかし彼は決して是を、勝れて有るは悪い、と解して、更に神が独り是を持つと誓い、唯神のみ是を賞として頒ち与えたものではありませんまい。さもないければ、此プロヂコスはシモニデスが無駄な者で、決してケオスの人間ではないと言うでしようから。しかし私は、シモニデスが此歌に於て考えていると私に思われることを、貴方に談してみたいのです、若し貴方が、貴方の言つてゐる其事、つまり詩について私がどんな者であるか、私を試してみようと思われるなら。しかし貴方の希望によつては、私が貴方から聴きましよう。

するとプロタゴラスは僕の此言を聴いて

おゝソクラテス、君の思い通りに。

と曰った。またプロヂコスとヒピアスとの兩人は熱心に其を懲しやうとしたし、他の人々も亦希望した。
▲そこで僕は曰った

さて、其では此歌についての私の見解を諸君に詳述することを私は試みよう。

抑々哲学はクレテやラケダイモン¹に於てヘラスの人々の間に最も古い、且最も拡っているものであり、又非常に多くのソピステス達がかの地には居る。しかし彼等は自己を隠し立てゝ、無学者であるように装うているのであるが、其は丁度プロタゴラスが言つたあのソピステス達と同様に、智慧を以て彼等がヘラスの人々を凌駕していることの知れ渡ることを恐れ、むしろ彼等は戦うこと即ち勇敢に於て勝れていると思われんが為であつて、つまり若し彼等の勝れている点が人に知れると、総ての人々が其事、即ち智慧、を練習するに相違ないと思慮することである。そこで彼等は其を包み置してしまつて、其諸都市に入込んでゐるラコニ主義者²どもをすつかり欺あざむいている、そこで其者どもは彼等の真似をして、耳の打合いをしたり、仕合の革鞭を持ち歩いて、体育を励み、短かい上着を引掛けたりしてゐる、つまり其等の事柄によつてラケダイモンの人々はヘラスの人々を支配していると信じてゐるのである。

ところがラケダイモンの人々は、何等の拘束なく彼等の許に居るソピステス達と一緒に成ろう

と思ひ、もはや隠れて一緒に成ることを厭うに到ると、其等のラコニ主義者を追放してしまふし、又若し誰か他国の訪客が泊っている場合には、其訪客に隠れてソピステス達と一緒に成る、更にまた彼等は、彼等が教育している事柄を若者どもが忘れることを恐れて、丁度クレテの人々のする様に、若者どもの誰一人をすら他の都市に出向くことを許さないのである。而も其都市に於て教育に大なる考慮を払っている者どもは決して男子ばかりではない、女子も亦そうである。さて諸君は、私の言っている此事が真実であつて、ラケダイモンの人々は哲学や談論に向つて最も善く教育されていると云うことを、次の事で知ることができよう。茲に何人かゞラケダイモンの人々の中でも特に劣つてゐる者と一緒に成つて見るならば、其人は談論に於てなるほど永い間彼が如何にも劣つて見えることを発見するであらう、ところが一度語られてゐる事柄が了知されるに到ると、忽ち語るに足る而も短い引締つた言葉を、さながら投鎗の名手の如く、投げ込む、すると其討論者はまるで子供にも等しい有様を呈するのである。

さてかくの如き言葉を語り得ると云うことは完全に教育し上げられたる人々の能くするところであることを知り、従つて此事即ちラコニゼインとは体育の愛好と云うよりは、むしろ特に智慧を愛好（哲学）することである、と云うことを知了している人々は、現在の人々の中にも有り、

又古えの人々の間にも有る。ミレトスのタレス、ミチレネのピタコス、プリエネのピアス、我々の市民のソロン、リンドスのクレオブロス、ケナイのミソン及び彼等の中で第七番目に呼ばれているラケダイモンのキロン、彼等は即ち其人々の中に数えられるのである。此人々は昔ラケダイモンの人々の為す教育の熱心家であり、崇拜者であり、弟子であつた、そして彼等の智慧はそう云うもので、つまり彼等の各々によつて言われた言葉は短い、記憶に値するものである、此事は誰でも知るところであらう。彼等は又相与にデルポイの神殿に赴いて、あらゆる人々が口々に言っているあの言葉、「汝自らを知れ」と「極端を慎め」の句を書き記し、よつて智慧の初物の供物をアポロンに捧げたのである。何の目的で私は此事を語つたのであるか。其は此事即ちラコニ式の短言法こそが古えの人々の哲学がとつた其様式であるからである。

さてまたピタコスの、智者達によつて称揚されて来た此句、「勝れて有るは困難。」も庶人の間に広く言い伝えられていた。そこでシモニデスは、智慧の上で名声を望んだ者であつた為に、若し此句を、名声ある闘技者をでも倒す様に、打ち破つて其を凌駕しさえすれば、自分は其当時の人々の間に名声を博するであらうと考えた。そこで此句に向い、而も此理由からして其を打ち倒すことをたくらんで、彼は此歌全体を作つたのである。私にはそう見えるのである。

二十九
▲

抑々私の言ったことが真実であるか、其を我々は皆して相与に考察してみよう。とつつけ此歌の第一句が眉唾ものであるように見えはしまいか、若しも彼が、善き人と成るは困難である、と言おうと思つて、而もそこへ「のが」を投入していると云うのは。なぜかと云えば此詞は一つの言い表しに投入されているとは見えない、よし人が、ピタコスと言葉に対して云わば論諍してシモニデスが言ったのであると、解釈しないとしたところで、つまりピタコスが『勝れて有るは困難。』と言つたに対し、之を論駁して彼が『そうではない、善き人に成るのが、困難なのである、おゝピタコス、真実には。』と言つたのである。しかし、真実、に善き者に、とではない、此「善き」に冠らしめて「真実に」を言つたのではない、そうだとすれば人々の中で或者どもは真実に善く、また或者どもは善くはあるが、真実にではないと云うことになる、是はあまり馬鹿げているし、又シモニデスの謂おうとした所でもあるまい、むしろ此「真実に」は此歌の中で其位置が違つているとしなければならぬ。そこで彼は次の様な風にピタコスの句を前提として言つてゐる訳になる、今我々がピタコス其人を発言者とし、シモニデス^ニを對える者と仮定するとして、先ず彼が『おゝ人々よ、勝れて有るは困難。』と言うと、今度は彼が、『おゝピタコス、貴方の言は真ではない、なぜかと云えば、有るにはあらずして、善き者に成るのが、手に足に心にぞ格しき、

咎無く作られたる者に、其が困難である、真実には。』と对えたかのような次第である。かう云う風に理由あつて其「のが」を彼は投入したのであり、「真実に」は最後に位置するのが正しいように見える、のみならず此先の歌全体が、此意味で此句が言われていることを、証拠立てるのである。勿論良く作られている箇所は多い、従つて此歌の中の一句々々について、如何に良く作られているかを明かに説き示すことは――なぜかと云えば如何にも優美に且念が入れてあるから――しかし其をかゝる点に即して説明してゆくことは、長過ぎる嫌いがある、そこで今はむしろ其全体の型と、此歌全体を通じて何よりも特にピタコスの言葉に対抗している、其意図とを我々は考究してゆこうと思う。

▲さて此後で彼は僅かばかり説明して言っている、今其を談話の形で言つたとしてみると――

善き人に成るのが困難である真実には、而も僅かな時の間のみ成り得るに過ぎない、しかし成つて其状態に停り、貴方の言う様に、善き人で有るのは、おくピタコス、不可能であり又人間事ではない、むしろ神のみ独り此賞を持つのである。

人はしかし悪しからず有るを得ず、

彼をば施す術も無き運命は打ち倒さん。

では何人を施す術も無き運命は船の操縦に於て打ち倒すか。勿論素人をではない、なぜかと云えば素人はいつも引き倒されているのだから。譬えば誰も横になつてゐる者を投げ倒す訳にはゆかないが、しかし立つてゐる者を投げ倒して横たわらしめるのである、横になつてゐる者をではない、それと同様に施す術を知つてゐる者を施す術も無き運命は打ち倒すが、常に施す術を知らぬ者をではない、又舵取りを大嵐は襲つて施す術を知らざらしめるし、又農夫を險惡なる天候が到來して施す術を知らなくしてしまうのであらう、又医者に於ても同様である。なぜかと云えば勝れたる者には悪く成る余地が有るからである、恰もまた或詩人が

さて善き人は時には悪しく、時には勝れたり

と言つて、是を証拠立てゝゐる通り。しかし悪い者には悪く成る余地がない、むしろ常にそう有るのが必然である。そこで施す術を知れる智なる善き者を施す術も無き運命は打ち倒すからして、「悪しからず有るを得ない」ところが、おくピタコス、貴方は「勝れたる者で有るは困難」と言われるが、しかし勝れたる者に成るのは、困難には相違ないが、可能である、しかし有るのは不可能なのである。

なぜかと云えば何人も幸福なれば（良行）善く、

不幸なれば（悪行）悪ろし。

さて何が文学についての善き行為（幸福）であるか、何が文学に向つて善き人を作るか。勿論其学識ではないか。又何たる良き行為が善き医者を作るのであるか。云う迄もなく病者の看護についての学識である。「悪くば（不幸）悪ろし」。さて何人が悪き医者となるのであるか。勿論先ず医者であり、而も善き医者であつた者に起るのである、なぜかと云えば其者にして復悪く成り得るからである。ところが我々医師の素人は、悪く行為したとて医者にも、或は大工にも、又かゝる事の何にも、成り得ないのである、そこで悪く行為しても、医者でなければ、勿論悪い医者には成らない。こう云う訳で善き人は、或は時節、或は悩み、或は病、或は他の何等かの事変によつて悪くなる、なぜかと云えば、唯是のみが不幸（悪行）なのであるから、即ち知識より離奪されること。しかし悪い人は決して悪くは成らない、なぜかと云えば常に悪いのであるから。そこで人が悪く成る条件としては、先ず其前に善に成つていなければならないのである。そこで歌の此部分は此事に加えて、更に次のことを暗示しているのである、即ち善き人で有り、善で最後まで完うすることはできない、しかし善く成ることは可能であり、又其者にしてまた悪く成り得るのであると云うことを。

しかし最も長く最も善き者として有り

神々の愛でたまう人々は。

三十一

▲此等のこと一切を彼はピタコスに向つて言つたのである、更に此歌が進むにつれて、此事を一層明かにしている。即ち彼は言っている――

是故に我は成り能わざる事を希求して、

空しくも行い得ざる希望に人生の一期をば投げ入れまい。

純に咎なき者をしも、際無き地より穀物取むる我等の中に、

我が見出しなば、君等に我は叫び報せん。

更に言っている――かくして歌全体を通して彼はピタコスの言葉に挑戦しているのである――

何人をも我は誉め又愛しよう

好んで 何等の恥ずべき事を

為さざる者ならば。運命には神々も争うたまうなし。

是も亦同じ事に向つて言われているのである。なぜかと云えば、シモニデスは好んで何等の惡を為さぬ者どもを、まるで他方には故意に惡を為す者が有るかのように、其人々を誉めると言明す

る程、其程無学ではなかつたのである。なぜかと云うに、凡そ智なる人々は誰一人、何人も好んで罪過を犯し、好んで恥すべき悪事を作すものである、とは思考していない、むしろ恥すべき悪を作す者は皆本意ならずして作すと云うことを、彼等は善く知つてゐる、私は大体此事を信じてゐるからである。そこで此シモニデスも亦、好んで悪を作さぬ者どもの讃歎者である、と言つたのではなくて、むしろ此「好んで」は自分自身の方につけて言つたのである。なぜかと云えば、美しくも善き人は屢々自己を強要して、例えば人はよく常規を逸した母とか父とか祖国とか或はそう云う何者かを持つものであるが、かゝる者の友となり又称讃者となる、さて劣つた人々は、かゝる者を持つ場合に、云わば両親や祖国の劣悪な点を好んで見且咎めては、之を暴露し又誹謗する、其は彼等の面倒を見なくとも、人々が其事を非難したり、罪しない用心なのである、そこで彼等を彌々咎め立て、敢て已むを得ぬ程度以上に惡意を加えるのである、然るに善き人々は其を隠し立てゝ誉めることを余儀無くする、そして仮令彼等が不正な目に遭つて、両親や祖国に対して怒る場合でも、自ら慰さめ和解して、其上にも此自分等に関係浅からぬ者どもを愛し又誉めるように自己を強制するのである、と彼は思つてゐたからである。そこでシモニデス自身も亦、私の思うに、自ら屢々專制君主やかゝる他の人を誉め又讃美したが、しかし其は好んでではなく、

自分を強いてである、と思考して居たのである。そこで此事をまたピタコスに向つても言つてゐる――

私は、おゝピタコス、唯私が咎めることを好む者であるが故に、其故に貴方を咎めているのではない、なぜかと云えば

我には足れり、悪くもなし

仕末に困る程にもあらず

都市を益する法規を心得

健かなる者にしあらば。……彼をば我は

非難しまい、

と云うのも……我は非難を好む者ならず……

なぜかと云えば数知れぬ

馬鹿者どもの苗裔ひょうえいなれば。

そこで若しも咎めることを喜ぶ者があれば、彼等を咎めるに違がないであろう。

何者もげに美し、彼等に醜きは混りてあらじ。

Ⅱ Ⅱ 彼は此句を、恰も一切は白く、其には黒が混つていないと言うかの如き意味で言つたのではない、なぜかと云えば其ではあまりに可笑しいであろう、むしろ彼は中程なる者どもを認め、従つて咎めないと云うことを言つた訳である。彼は更に言葉を継いでⅡ Ⅱ そこで私は「純に咎なき者をしも、際無き地より穀物取むる我等の中に」、探ねてはいないが、「見出しなば、君等に私は叫び報せん」。従つて少くも是故に私は何人をも誉めまい、しかし中等であつて、何等悪を作さない者であれば、私はそれで満足している、そこで私は何人をも愛し又誉めよう、*Ⅱ Ⅱ 而も茲で彼はミチレネの人々の方言を用いているのである、其は特にピタコスに向つてこう云う為なのである、即ちⅡ Ⅱ 「何人をも誉め又愛しよう、好んで、——此好んど云う處で句読を切らなければいけないのである——何等恥ずべき事を為さざる者ならば」、しかし不本意ながら私が誉め又愛する人々も居るのである。そこで若し貴方が至当であり異質なることを中庸に語つたのであつたならば、おくピタコス、貴方を私は決して咎めはしなかつたのである。然るに今貴方は極端に、而も最も重大なることについて、誤りを犯していて、眞実を語つたと思つてゐる、其故にこそ貴方を私は咎めるのである。

▲おくプロザコスにプロタゴラス、是等のことをシモニデスは考えて此歌を作つたのである、と

私には思われるのです。

するとヒピアスが曰った

おゝソクラテス、なかなか良く君は此歌について説明をやつてのけたね、ところが我輩も亦是について一説を持つている、それも立派なもののだが、若し君達が希望とあれば、講演しよう。するとアルキビアデスが曰った

そう、しかし、おゝヒピアス、またにしましょう。今は先にプロタゴラスとソクラテスとが互に誓約した事を果す必要がある、そこでプロタゴラスが若し質問する意志でいるなら、ソクラテスが答え、若しまたソクラテスに答えるつもりなら、他方が質問しなければならぬ。

そこで僕は曰った

僕は少くもプロタゴラスにどつちでも彼の好む方を譲る、がしかし若し彼に此意志があるならば、我々は歌や詩についての考察はやめにしよう、そして我が最初、おゝプロタゴラス、貴方に質問した其事柄について、貴方と与に考察しながら、私は最後まで進みたいのです。と云うのは、詩について対談すると云うことは、劣等な下品な人々の酒宴と、さまで変りのないように私には思われるからです。なぜかと云えば、其人々は、其無教育の故に自分達同士によつて、つまり彼

等相互の音声、談論によつては酒席に偕^{かいりく}樂することができない為に、笛妓の市価を高からしめ、多額の金を払つて他の音声である笛の音を用いる、そして其音の力を借りて宴樂するのである。然るに美しくも善き教養ある飲手が揃つた場面に於ては、貴方はそこに一人の笛妓、舞妓、琵琶妓をも見出だし得ないばかりか、彼等は彼等同士で、其等の道化も巫^ふ山^{ざけ}戯も更に用いることなく、唯自分達だけの音声によつて交際偕樂するに充分なる力を持ち、彼等同士で順番に秩序も乱さず或は語り、或は聴くのを観るでしょう、よかなり多量に酒を飲みはするが。こう云う風に此種の交際は、若し其人々が自ら、我々の多くが互に認め合つているような、そう云う人物を以て任じているならば、他の詩人達の音声を何等必要としない、彼等を引張つて来て多くの人々が談論を試み、或人々は此事を其詩人は考えていたと言ひ、又他の人々はまた異つた事を主張したところで、明確を期待することのできない問題を論議するだけで、彼等の言つた事について直接其詩人達に聞く訳にはゆかない、そこで彼等は此種の交際には別れを告げる、そして自ら彼等自身によつて、自分達同士の談論の間に、互に吟味し、吟味させて、彼等同士で交際するのである。此様な人々を我と貴方とは学ぶべきであろうと私は思うのです、そして此詩人達を措いて、我々同士により、真理と我々自身とを吟味しながら、互に談論しなければならぬ。よつて若し貴方が

なお質問しようと思われるならば、私は悦んで貴方の為に答える役を引受けます、而も更に願わくば、貴方は私の為に、我々が途中で研究を打切ったあの問題について、其結末をつけるように努力してください。僕は此事及び他にも此様な事を談した、しかしプロタゴラスはどつちをするとも明かにしなかった。するとアルキビアデスがカリアスの方を向いて曰った

おゝカリアス、君には、現にプロタゴラスが美しい行動を取っている、と思われるか、解答を与えるとも、与えないとも、明かそうと思わないでも。僕には決してそうは思われない。むしろ本来なら対論すべきだ、がしかし、さもなければ対論する意志は無いと言ひ切る必要がある、そうすれば我々は此人に其を承認もし得るし、又ソクラテスは誰か他の者と、或はまた他の希望者が誰でも他の人と、談論することもできる訳だから。

するとプロタゴラスは、アルキビアデスにはこう言われ、またカリアスを始め居合わせた他の人々殆ど総てからは要請されたので、羞かしくなった、少くも僕にはそう思われた、そこで不承々々にも対論することを諾し、自分が答えるから質問せよと命じた。

▲^{三十三}そこで僕は曰った

おゝプロタゴラス、私が貴方と他意あつて対論するのであると思わないでください、全く私は

唯私が日頃解決し得ないでいる問題について貴方と与に考察したいだけなのです。誠に尤なことをホメロスは此句の中に言っている、と私は思っているのです

俱に兩人で進みなば、他は他の者に知らしめむ。

なぜかと云えば我々人間は、皆が一致すれば、如何なる事業、主張、企図に向つても、一層良く進み得るからです。「しかし若し唯独りにて思う時」、直ぐにも人は処々方々を、己の考えを述べ又与に事を確めるべき人を探して、其人に遭遇する迄、歩きまわる。そう云う訳で私も亦其為に貴方と、他の人とよりも、特に談論したいのです、なぜかと云えば私は、貴方が最も善く、優れたる人の当然考察に齎す諸問題について、而して特にも徳について、考察し得ると、見込んだからです。一体貴方の外に誰がありますか。其貴方たるや、啻に自身が、恰も自分は優れているが、他の人々をそうすることができない人々の如くに、美しくも善き者であるばかりでは無い、と思つてゐるのですから。しかし貴方は自身が善き者であると同時に、また他の人々をも善くすることができものではありませんか、而も此程までに貴方は自ら信ずることが篤い、そこで他の人々は其術を隠蔽しているのに、貴方は堂々と全ヘラスの人々に向つて自己を宣伝し、自らソピステスと名乗り、自己を教育と徳との教師として提供し、其労銀を得ることを要求した抑々最初の人

なのですから。そこで此問題についてどうして貴方に救援を求め、質問し、相談しないでいられましようか。そうしない訳にはゆきますまい。よつて私は今、最初に質問したあの事について、其或点は之を、再び初つから、貴方によつて想い起させてもらい、其或点は之を俱に考究したい希望を持っています。私の思うに、其問題は即ち次の如くであつた——智慧と思慮と勇敢と正義と敬虔と、茲に五つの名目が有るが、一体此等是一个の事柄についているのであるか、それとも此等の名目の各々には或独自の有性が根柢に横たわつており、其各々の事柄は各自の能力を有し、従つて其等の一は他の如くでは無いのであるか。さて貴方は、其等の名目は一者の上に加えられるてゐるのではない、むしろ其等の名目の各々は独自の事柄に名づけられている、しかし其等の総ては徳の部分であつて、而も金の部分が相互にも、また其等が其部分である其全体にも同様であるが如くではなく、むしろ顔の部分が、其等が其部分である其全体にも、相互にも不同であり、各々独自の能力を有っているが如くである、と言われた。其等が以前の通りに、今も貴方にそう思われているならば、そうと言つてください、若し又何等か相違してならば、其を限定的に言つてください。私としては、よし今貴方が別な主張をしても、決して貴方に苦情を持ち込みはしませんから、なぜかと云えば、あの時には貴方が私を試すつもりであの事を言われたのであつても、私

は別に不思議とは思いませんから。

▲^{三十四}では、おゝソクラテス、儂は君にこう言おう——其等総ては徳の部分である、而して其中の四つは先ず殆ど相互に相等的い、しかし勇敢は其等総てから極めて甚しく相違しているのである。ところが儂が真実を語っていることを君は次の点で認めることができよう、乃ち^{すなわ}多くの人々は極めて不正、不敬虔、無駭、無学にして而も殊に最も勇敢であると云うことを観察してみたまえ——

待つてください——と僕は曰つた——貴方の其主張は考究する値打がありますから。抑々勇敢なる人々を貴方は特に（無懼^一〔むく〕）大胆なる者であると謂うのですか。

無論、また多くの人々が進む事を恐れている事に向つて進む者どもとも謂う。

さてそれでは、徳は美なる者であると貴方は謂い、そして美なる其ものの教師として貴方は貴方自身を、提供しているのでしょうか。

勿論最も美しき者であると謂っている、苟くも儂が狂氣していない限り。

では其の或部分は醜、或部分は美なのですか、それとも全然美なのですか。

全たき美である、特にも有らん限りに於て。

さて貴方は知っていますか、泉水の中へ大胆に飛込む者は何人ですか。

知っているさ、水泳家だ。

しかし其は彼等が其を知識しているが故に他ならないでしょう。

それはそうだ。

では騎馬戦に於て大胆に行動する者は何人ですか、騎兵ですか、馬に乗れない者ですか。

騎兵さ。

楯を持つては何人ですか、楯兵ですか、他の者ですか。

楯兵。更に其等以外のあらゆる事柄についても、若し君が其点を探究するならば、知識している者が知識していない者より、より大胆であり、彼等自身と雖も学んだ時には学ばなかつた以前より一層大胆である。

しかし何人かを貴方は既に見知っているのですか、其等の所有する事柄に於て、其を知識していない者で、而も其に向つて大胆なる行動を取るような人を。

それはそうさ、儂は頗る大胆なる者どもを見知っている。

では其大胆なる者は又勇敢なる者なのですか。

そうだとすれば勇敢とは恥ずべきことであろう、なぜかと云えば其者どもは氣違いなのだから。すると貴方は勇敢なる人々をどう言おうと謂うのですか、大胆なる人々であると謂うのではないのですか。

とにかくそう謂うのだ。

では其人々、つまりそう云うように大胆なる人々は勇敢なる者ではなくて、むしろ狂人と見えるではありませんか。そして又先の場合のかの最も智なる人々は最も大胆であり、而も最も大胆であつて最も勇敢なのでしょう。更に此主張に基づいて、智慧は勇敢ではありませんか。

おゝソクラテス、儂が君に答えて言つた事を君は良く記憶していないのだ。少くも儂は君から、勇敢なる人々は大膽なる者であるか、ときかれたのに対して、其には同意した。しかし大膽なる人々が勇敢なる者であるかと云う其質問を受けたのではない。なぜかと云えば、若し君があつた時に其質問を發したのであつたら、全体がではないと言つたのだつた。しかし勇敢なる人々は大膽なる者ではないと云うこと、換言すれば儂の下した応答に於て儂の言明し方は正しくなかつたと云うことを君は決して証拠立てはしなかつたのだ。むしろ知識している者は、自身、知識しなかつた自身よりも、又かゝる他の人々よりも、一層大膽であると云うことを君は明かにし、此点に

於て勇敢と智慧とは同一であると思つてゐる。しかし其方法を以て進めば強さも亦智慧であると君は考えることができよう。なぜかと云えば先ず最初に若し君が此道に出て儼に、強き人々は有能なる人々であるか、と質問するならば、儼は肯定するだらう、次いで、相撲^{すま}うことを知識してゐる人々は、相撲^{すもう}を知識してゐない人々より有能であり、其人々自身も亦自身より、学んだ時には学ぶ以前より、有能であるか、ときくなら、儼は其を肯定するだらう、此事を同意するならば、君は其同一証明法を使用して、儼の意見に従つて智慧は強さである、と主張する事が君には許されるであらう。しかし儼は此場合、有能なる人々は強い者であるとは決して言明してゐない、但し強い人々は有能なる者であるとは言つてゐるのである。なぜかと云えば能力と強さとは同一ではないからだ、むしろ其一方は知識から来るのである、つまり能力は、更に狂氣及び激情から、ところが強さは肉体の天性及び養生からである。同様に先の場合でも大胆と勇敢とは同一ではない、従つて勇敢なる人々は大胆なる者であると言ふ結論は出るが、しかし大胆なる人々は勇敢であるとは言えない、なぜかと云えば、大胆は、能力の如く、術智からも激情からも狂氣からも人々には来るのであるが、勇敢は魂の天性及び養生から来るのであるから。

▲^{三十五}おろプロタゴラス、貴方は、人々の或者どもは良く生き、或者どもは悪く（幸不幸）、と言

ますか。

彼は肯定した。

それでは一体、若しも苦しみ^か唧^かつて生きるならば、其人は良く生きているのである、と貴方には思われますか。

彼は否定した。

ではどうですか、若し快く生きて一生を終つたならば。かく生きた人は良く生きた、と貴方には思われませんか。

少くも儼にはそう思われる。

従つて快く生きることは善、不快には悪である。

すると彼は曰つた

苟くも美しき事に快樂して生きるなら。

全くですか、プロタゴラス、貴方も亦、多くの人々と同様に、快きことの或者は悪、苦しきことの或者は善と呼ぶのではないのでしょうか。なぜかと云えば私はこう云う意味で質問しているのです、抑々快きものであると云う点に於て、其点に於て其は善では無いのですか、若し其から

何か他のことが結果せぬならば、亦復苦しきことは、其と全く同様に、苦しきものである限り、悪では無いのですか。

おゝソクラテス、儼には分からないよ、君のきくようにそう簡単に、快きことは悉く善、苦しきことは悪である、と儼が答えなければならないか、どうかと云うことは。しかし啻に其答えとしてののみならず、儼の全余生の為にも、快きことには善でないものも有り、また苦しきことには悪でないものも有り、そうなのも有り、更に第三に悪でも善でも、何れでもないものも有る、と答えておくのが、儼には一層安全であるように思われる。

そこで僕は曰つた

快きものを貴方は、快樂を俱有するか或は快樂を作り出すものと呼びますか。

それはそうだ。

私が、快きことである限りに於て、其は善ではないのか、と云うのは、つまり其快樂を問うて、其が善ではないのか、と云う意味なのです。

君の毎度言う通り、おゝソクラテス、我々は其を考察しよう、そして若し其考察が合理的であると思われ、且快と善とが同一であることが明かになれば、我々は其を承認しよう、しかし若し

そうではない場合には、我々は否定する迄である。

では貴方が其考察の導者になる気ですか、それとも私が先導しましょうか。

君が先導するのが当然だ、此論を君が始めたんだから。

そこで僕は曰った

さあ、次の様にでもしてみたならば、其事柄が我々に判明してくるでしょうか。今人が健康や肉体の他の或状態について外形から人を診療する場合に、顔と手の先を見てから、『さあ私に胸と背とを出して見せてくれ、一層はつきり診察し得るように。』と曰う、其と同様に私も亦此考察に向つてそう云うことを望むのです。善と快とについて、貴方が言われる様な、そう云う状態に貴方があるのを見て、私は是非こう云うことを言いたいのです——さあ、では私に、おゝプロタゴラス、貴方の精神の此点を更に赤裸々に明かしてください、どう云う状態に貴方はあるのですか、知識について。其が貴方にも亦、多くの人々と同様に思われるのですか、それとも他の風に。知識について多くの人々には其がこんな者であると思われています、つまり強き導者でも、支配者でもない。更に其がかゝる者であると彼等は考えていないばかりか、多くの場合人間には知識が内在しているが、其知識は其人を支配する者ではなく、むしろ他の者、云わば或時には

激情、或時には快樂、或時には苦痛、又時には恋愛、多くの場合には恐怖が左右する、何んてことは無い、知識については、奴隸についてと全く同様に、其は他一切の者によつて引摺り廻される者である、と考えているのです。そこで抑々貴方にも其がそう云う者であると思われるのですか、それとも知識は美にして人間を支配する者であり、苟くも人が善なる事、美なる事を認識する場合には、知識が命ずること以外の何事かを為すように、何者かによつて征服されると云うことはなく、むしろ叡智は人間にとつて援助するに充分なる者である、と思われませんか。

勿論君の言う通りに思われるさ、ソクラテス、のみならず、苟くも何人かにとつてそうならば、儼にとつても亦、智慧と知識が所有する人間的事柄の中に於て最も力強きものでは無いと主張するが如きは、恥すべきことだ。

如何にも美しく貴方は言われ、また眞実を語られた。ところが貴方も知らるゝ通り、人々の多くは私と貴方には従いません、むしろ、多くの者どもは最も善きことを知り、而も其を実行することが彼等にとつて出来得る場合にも、之を意志しないで、むしろ他の事を為すものである、と言つています。又私が今迄度々、其原因は何であるか、と問うた所の其人々は皆、快樂や苦痛によつて屈伏され、又は私が今言つた事の中の孰れかによつて征服されて、其を為せる者どもは為

しているのである、と言っているのです。

僂の思うに、おゝソクラテス、人々と云うものは多くの其他の事柄についても正しくは言わぬ者なのさ。

さあ、私と俱に其人々を説服して、彼等の所謂る、快樂によつて屈伏され、其事に因つて、よし最善の事を認識するとも、其を實行しないと云う、其状態が其人々に於て如何なるものであるか、と云うことを教えておやりなさい。なぜかと云えば恐らく、若し我々が『君等は正しく言つてはいない、人々よ、むしろ偽つてゐる。』と曰えば、彼等は我々に質問して、『おゝプロタゴラスにソクラテス、若しも此状態が快樂に服従することでないならば、一体どんな事なのか、君等は其をどんな事であると言うのか。兩人で我々に談してくれ。』と曰うでしょうから。

何だつて、ソクラテス、我々は其多くの人々の意見を考察しなければならぬのか、彼等は手当り次第の出鱈目でたらめを言うものなんだ。

しかし私は、勇敢について、其が徳の其他の部分との關係に於てどんな状態にあるかと云うことを発見するのに、此事は我々に何等か益するものであらう、と思ふのです。そこで若し、今し方我々によいと思われたこと、つまり私が其事が最も善く判明するであらうと思ふ所以の道に、

私が先導すると云うことが、依然として我々の間に留つてゐる、と貴方に思われるならば、附いて来てください。しかし若し貴方に其氣が無くば、よしにしましょう、其方が貴方に好いのなら、するとプロタゴラスが曰つた

君の言う所にも一理ある、君が始めた様に、其を遂行したまえ。

▲^{三十六}そこで僕は曰つた

現に繰り返して若し彼等が我々に『君等は其事をどうであると謂うのか、快楽に服従している和我々が主張していた事を。』と問うならば、少くも私は彼等に対してこう言うでしょう。「さあ聴きたまえ、僕とプロタゴラスとは君等に説明してみるから。さて、諸君、君等にとつて此事が起り来るのは、かゝる人々に於てある、例えば、よく有ることだが、喰う事、飲む事、淫事に因つて、其等が快き事であるが故に、征服され、よし其が煩わしい事であると知つても、尚其を為すが如き人々に於て、としか言えまい。」

彼等は其を肯定するだろう。

そこで私と貴方とは更に彼等に問うでしよう、「其は如何なる理由によつて煩わしいことであると君等は言うのか。其等の事の孰れもが現在直ちに快楽を供し、従つて快きことであるが為で

あるか、それとも未来に於て病氣や貧困を作つたり、其他かゝる多くの事の因を為すが為であるか。或は若しもかゝる事の何一つをも未来に將來せず、唯喜ばしむるだけであるならば、其でも尚其は悪いことなのであらうか、人を其状態に於て苟くも何等かの風に喜ばしむるが為に。」しかし我々は彼等が、おゝプロタゴラス、其現在の快樂を作り出す点に即して其等が悪いことではなく、むしろ未来に起り来る事、病氣や其他の事の為の故にである、と答える以外に何とか言い得ると思ひますまい。

するとプロタゴラスは言つた

其多くの人々は其事を答える、と儼は思う。

「さて、病氣を作り出すものは苦しきを作り出す、貧困を作り出すものも亦苦しきを作り出すのであらう。」私の思うに、彼等は之を承認するでしょう。

プロタゴラスは之に同意した。

「そこで、諸君、君等には、僕とプロタゴラスとが言つてゐること、即ち其等が悪いことであるのは、唯々苦しさに終極し、人を他の快樂より奪い去るが為の故のみであつて、其他には何等の理由もない、と云うことが明かになつたであらう。」すると彼等は之を承認するでしょう。

我々兩人は之に意見が一致した。

さて更に今度は彼等に反対の方の事を若し我々がきいて、「諸君、君等はまた苦しきことを善いことであ『る』」と言っているが、其は次の事を言っているのではないか、即ち、例えば体操、出征、医者による、つまり灸^{やいと}焼^{やき}、切断、服薬、絶食によつてなされる治療、其等は善いことではあるが、苦しいことだ、と。」そう曰つたら、彼等は肯定するであらう。

彼にもそう思われた。

「さて君等はどつちの理由で其等を善いことと呼ぶのであるか、現在の時に於て極端な苦惱及び痛傷を供するが為の故にあるか、それとも未来の時に到つて其等から肉体の健全及び良好、都市の救済及び他者の支配及び富が起り来るが為の故にあるか。」私の思うに、彼等は後の理由を認めるでしょう。

彼にもそう思われた。

「それでは其等が善なる所以は、全く其が快樂と、苦痛からの離脱及び転向とに終極するを以てに他なるまい。それとも何か他の結果（目的）、其を目指して君等が其等を善と呼んでいる、其を君等は告げることができるか、快樂及び苦痛以外に。」私の思うに、彼等はできないと言うで

しよう。

できないと儼にも思われる——とプロタゴラスは曰った。

「そこで君等は快樂を、善であるとして、追い求め、苦痛は、之を惡として、逃れるのであらう。」
彼も同意した。

「従つて此事は惡であると君等は思考しているのだ、即ち苦痛は、而して快樂は善と、なぜならば喜ぶと云う其事をすら時には、即ち其が、其が有する限りの快樂以上の快樂を奪うか、或は其中に有る快樂以上の苦痛を供給する場合に於ては、惡であると君等は言っているのだから。なぜならば其喜ぶと云う事自体を惡と呼ぶに若し何か他の理由が有り、何か他の結果を目指してのことならば、君等は其を我々にも告げ得る筈であるから、而も其は為し得ないに相違ない。」

彼等はできまいと儼には思われる——とプロタゴラスは曰った。

「更に復悩むと云うこと其事についても亦同一事情が存するのであらう、此悩むと云うこと其事をも君等は時には、つまり其内に在る苦痛よりも大なる苦痛を除去し、或は其苦痛より大なる快樂を提供する場合に於ては、善と呼んでいるのであらう、なぜならば君等が其悩むと云う其事を善と呼ぶに際して、若し君等が、僕が主張している事以外の何か他の結果を目指しているならば、

我々に其を告げ得る訳であるから、而も君等はできないに相違ない。」

君の主張は真実だ——とプロタゴラスは曰った。

「更にも亦——と僕は曰った——諸君、若し君等が僕に『一体全体何の為に此事について君は多くの事を而も種々なる方面から語っているのか。』と問うならば、少くも僕は曰おう、僕の考をよく察してくれ、と。と云うのも第一、君等が呼んで快樂に服従していると云う其事が一体何で有るか、を判明させることは容易なことぢやないんだ、而も如上の事の上に其全き説明は依立しているのである。だがしかし猶今に到って其事を覆えすこともできる、若し君等が何等かの理由によつて、善は快樂ならざる他のものであり、惡は苦しさならざる他のものである、と主張し得るならば。或は君等は苦痛無く一生を快く暮らすことを以て満足するのであらう。さてしかし若し其を以て満足し、而も君等は、其に終極しない或他のことが善或は惡である、と主張し得ないならば、次の事を聴きたまえ。僕はつまり君等に言うのである、其がそう云う次第ならば、君等の言は可笑しいものに成ると、若し君等が、屢々人間は悪いことを、悪いことであると、知りながら、而も猶、よし其をせずにすむ場合でも、快樂によつて引廻され、敲たたき出されて、其を行ふものである、と言う場合には。更に亦君等はこうも言っている、即ち人間は善き事を知ると

雖も、現在の快樂の故に、其によつて征服されて、其善事を行うことを意志しないものである、と。

三十七

▲しかし其が可笑しなことであると云うことは、若しも我々が多くの名目、つまり快・苦・善・惡を同時に使用しないで、むしろ其等は二つに過ぎないことが明かになったのであるから、單に二つの名目を以て其を呼称し、最初には善と惡とを以てし、次には快と苦とを以てするならば、極めて明かになるであらう。そこでかく決定しておいて、我々は、人間は悪いことを悪いことゝ知つていても、而も其を行う、と言つてみよう。そこで若し誰かと我々に『どう云う訳で』と問うならば、我々は、征服されて、と言おう。『何によつて』と其男は我々にきこう、しかし此場合到我々が、快樂によつて、と言ふことは許されてない、なぜかと云えば其事柄は既に快樂なる名目の代りに他の、善と云う名目を取っているから、そこで我々は彼に答えて、征服されて、と言ふとしよう、すると『何によつて』と彼は言うであらう。ゼウス！ 善によつて、と我々は答える。そこで若しも我々に質問している者が人の悪い男であるとしたら、吹き出して言うに相違ない、『よくも珍妙な事を君等は言つてゐるね、若し人が悪いことを、悪いことであると知り、而も其をなす必要もないのに、行ふのは、善いことによつて征服されるからだ、なんて言うのは——彼は更に言葉を繼いで——抑々其善いことは君等の内に於て其悪いことに勝つ資格を有つて

いないのか、それともいるのか。』我々は勿論、其資格を有っていない、と答える、さもなければ、快樂に服従していると我々が言っている其人間は過ちを犯さなかつたことになつてしまふから。『如何なる点に於て——と彼は恐らく言おう——其善きことは其悪いことに對して無価値なのであるか、或は其悪いことが其善きことに對して。其一方がより大、其他方がより小である場合、或はより多く、片方がより少い場合であるか、又は其他の点に於てあるか。』我々は其点以外の事を言うことはできない。すると彼は曰おう、『従つて此征服されると云うことを君等は、より少い善の代りにより大なる惡を取ることである、と謂っている訳であるのは明白である。』是は其通りである。さて我々は一転して再び今度は其同一事柄に對して快と苦との名目を以てしよう、そして言おう、即ち人間は——先には悪いことをと言つたが、今度はこう言おう——苦しきことを、苦しきことと知ると雖も、快きことによつて征服されて、行う、と。勿論其快きことは勝つ資格を有つてはいないのだ。しかし快樂が苦痛に對して有つ無資格としては他にどんなことがあるか、相互の過超及び欠劣に他なるまい。つまり其等は相互により大及びより小、より多く及びより少く、より以上及びより以下に成るものである。さて若し或人が、『だが、ソクラテス、現在の快きことは後の時に到つて来る快きこと及び苦しきことよりも遙に強い。』と曰うならば、

僕は答えるであろう、まさか快樂と苦痛以外の何等かの点に於てではあるまいね、他の点に於てと云うことは有り得ないから。むしろ秤ることの上手な人の様に、快きことは其で綜合し又苦しきことは其で綜合し、更に近きものと遠きものとを秤にかけて、どっちがより多いかを言いたまえ。そこで若し快きことを君が秤れば、常により大にしてより多い方が扱はるべきであり、若しも苦しきことと苦しきこととならば、より少い、より小なる方がである。しかし若しも君が快きことを苦しきことに対して秤り、而も悩ましきことが快きことによつて超過されるならば、近きものが遠きものによつてであらうと、遠きものが近きものによつてであらうと、そんなことは度外視して、其快きことの内在している方の其行動がなざるべきであり、若し亦快きことが悩ましきことによつてならば、なざるべきではない。此等の事は他の何等かの状態にはあり得まい、と僕は曰うであろう、諸君。（君等はどう思うか）私は彼等が反対を主張し得ないことを知つています。

あの人にも亦同様に思われた。

「実際に此事が此通りであれば、僕は曰おう、君等は僕に次の事を答えてくれ。君等に於て其視覚に同一の大きさの物が近くではより大きく、遠くからはより小さく現われるか、どうか」

彼等は肯定するであらう。

「又濃密なる物や多数なる物も同様であるか。又同一の音声も近くではより大きく、遠くからはより小さく。」

彼等はそうと言うであらう。

「さて若しも我々にとつて良く行ふ（幸福）と云うことが、大なる長さのものを行い、抑び、小なるは之を逃れ、行わないと云う其事に存したと仮定したら、そも我々には如何なるものが生活の救助であるように見えるか。一体度量の術であるか、現象の力であるか。或は此力は我々を迷わし、同一物の取扱に於て上を下へと転変せしめ、大及び小なる物を行い又は選択するに際して後悔せしむる、是に反して度量の術は其現象の力を奪い、真実を明かにし、以て魂をして、真実の上も留まることによつて、安息を保持せしめ、かくて生活を救済するのではないか。」抑々其人々は是に對して我々を救済する術は度量の術であると同意を表するでしょうか、それとも他の術を以て答えるでしょうか。

度量の術を以て（と彼等は答える）——と彼は同意して曰つた。

「では何か、若しも奇数と偶数の選択の中に、時にはより多きを、時にはより少きを、或は其一

類を同一類に対して、或は異類を異類に対して、近かろうが、遠かろうが、其を正確に扱ふ場合に、そこに我々にとって生活の救済があると仮定したならば、何が我々にとって生活を救済するか。抑々知識ではないか。抑々或度量的なるものではないか、苟くも其術が超過と欠乏とについてであるに於ては。而も奇数と偶数についてである以上、其は算数の術に他なるまい。」其人々は我々に同意するでしょうか、どうでしょう。

彼等は同意するとプロタゴラスにも亦思われた。

「さあ来た、諸君、快樂と苦痛との、より多き又より少き、より大なる又より小なる、より遠き又より近き其等の選択の中に我々にとって生活の救済が有ることが明かになったのであるが、一体第一に其が度量的とは見えないか、相互の超過と欠乏と而して等量との考察である以上。」

必然。

「若し度量的ならば、必然に術であり知識である。」

彼等は同意するであらう。

「其が一体どんな術であり知識であるか、此問題は又考察することにしよう。だが其が知識であると云う其だけで、君等が我々に質問したあの事について、僕とプロタゴラスとが説明しなければ

ばならない、其説明に対しては充分である。君等は質問したんだ、まさか忘れはしまい、我々が互に、何一つとして知識よりも強いものはない、むしろ其は、常に、其が内在している処、快樂や其他の一切に打ち勝っている、と一致した、然るに君等は、快樂は屢々智ある人間に打ち勝つものである、と主張した、而も我々が君等に同意しなかつた時に、其後で君等は我々に質問した、『おゝプロタゴラスにソクラテス、若しも其状態が快樂に服従していることでないならば、では一体其は何だ、其を何であると君等は主張するのか、我々に兩人して言つてくれ。』と。そこで若しもあの時に直ぐにも君等に我々が「無智」と曰つたら、君等は我々を笑殺したであらう。しかし今に到つて若し君等が我々を笑殺するならば、君等自身をも笑殺することになるんだ。と云うのは君等は同意してしまつたんだから——知識を欠けるが故に快樂及び苦痛の選択について過てる者どもは過ちを犯しているのだ——勿論其等（快苦）は善及び悪である——而して単に知識のと云うに止まらず、猶先に其上にも度量的と君等が同意している、其の欠乏によつてである、と。そこで過て^{あのま}る行為は知識を欠けるものであり、つまり無智の故になされることを、兎に角君等は自身でも知っている筈である。従つて快樂に服従していると云うことは其なのである、即ち無智而も最大の。而も其医者であると此プロタゴラスも更にプロヂコスもヒピアスも言っているのだ。

ある、然るに君等は、其が無智以外のことであると思つてゐるが故に、自身は勿論、君等の息子どもをも其等の事の教師である此等のソピステス達の許へ送らない、其は教えられ得るものだとも思わないで、むしろ君等は、銀のことばかり考えていて、其を此人々に払わない、そこで個人的にも社会的にも悪く行為（不幸）してゐるのである。」

三十八

▲此等のことを先ず其多くの人々に我々が答えてしまつたとして、さて、おゝヒピアスにプロヂコス、諸君に私はプロタゴラスと与にきゝますが——此問題は諸君に共通なことであるべきですから——一体私は真実を語つてゐると諸君には思われますか、それとも誤つてゐると。

其所説は特にも真実であると総ての人々には思われた。

それでは諸君は、快は善、苦は悪であることに同意な訳ですね。しかし私は此プロヂコスの名目の界説を要請したいのですが、一体貴君は其を快と謂おうとされますか、それとも所悦と、それとも所喜と、それともかゝるものを、どんな点から、どんな風に貴君は命名したい気ですか、おゝプロヂコス、其を私に、私の欲してゐる点に对照して、答えてください。

するとプロヂコスは笑つて、それでよいと同意した、亦他の人々も。
さてそれでは、諸君、次の様なことはどうですか。此事に関する、つまり苦なくして快く生き

ることに關する一切の行為は、抑々美しいものではありませんか。而して美しき行動は善であり、又有益でしょう。

皆にはそう思われた。

従つて若し快が善ならば、如何なる人でも、彼がなしていること以外の他のことが其より善であり、而も可能なことであると、知つても、思つても、更に是をなし得る場合でも、尚其（悪い）ことを為す筈はない。そして其自己に負けると云うことは無智に他ならないし、己に克つことは智慧に他ならない。

総ての人々にそう思われた。

さてどうです。一体次の如きことを貴君方は無智と謂つているのでしょうか、誤れる思想を持ち、極めて重大なる事柄に關して誤つていると云うことを。

此事も皆にそう思われた。

そこで僕は曰つた

そこで少くも悪いことに向つては勿論、悪いことであると思ふことに向つても、好んで人は赴くものではない、そして善きことを棄てゝ、悪いと思ふ事に向つて赴くことを意志すると云うこ

とは、人間の本性の中には無い様に思われる、更に若しも二つの悪の中孰れかを撰ばなければならぬ場合には、より小なる方を取ることができると、誰もより大なる方を撰びはしまい。其等一切のことは我々総てにそうと思われた。

そこで僕は曰った

ではどうですか。諸君は或ことを怖れ及び恐れと呼びますか。抑々私の謂っていることを、おゝプロヂコス、私は貴君に向つて言っているのです。私は其事を悪に対する警戒と謂うのです、よし其を諸君が怖れと呼ぼうが、恐れと呼ぼうが。

プロタゴラスにも、ヒピアスにも、其は怖れであり又恐れである、と思われた、しかしプロヂコスには、怖れではあるが、恐れではないと。

そこで僕は曰った

おゝプロヂコス、其は別に問題には成りません、むしろ次の如くなのです。若し以前の事が真実であれば、一体人々の中で誰が、彼が怖れている其事に向つて進もうと意志するでしょうか、そうでない方へ進み得るのに。むしろ一致された事から其は意味を成さないのではありませんか。なぜかと云えば、彼が怖れていることを、彼は悪であると思つてゐる、そして彼が悪であると思

っている其事には、何人と雖も故意に其に向つて進み又其を取らないと云うことが、一致されているのですから。

此事も皆にそう思われた。

▲^{三十九}そこで僕は曰つた

其等の事がそう根柢に置かれた上で、プロヂコスにヒピアス、我々に対して此プロタゴラスは、彼が最初に答えたあの事が、どう正当であるかについて、弁明すべきである。但し最初にと云つても、抑々の最初にはない、其時には、徳の部分は五つ有るが、其夫々は夫々の如くで無く、各自は独特の能力を持っている、と彼は言つた、しかし其事を私は謂っているのではなくて、むしろ其後で彼が言つた事をです。其後に彼は言つた、先ず四つのものは相互に殆ど同様であるが、唯一つ即ち勇敢は其他から極めて多く相違している、而も次いで彼は言つた、私が次の証拠によつて其を知ろう——『と云うのは、おゝソクラテス、君は、人々が最も不敬虔、最も不正、最も無嫌、最も無智であつて、而も最も勇敢であるのを、見察してみたまえ、其によつて君は、勇敢が徳の他の部分から特に相違していることを、知るであらう。』と。直ぐ其時既に其答に一驚した——更に諸君と分析研究するに至つて、尚一層驚いたが——そこで私は、勇敢なる人々は大

胆なる者どもと呼ぶかをきいた、すると彼は、『また少くも進む者とも』と曰った。おろプロタゴラス、貴方は其事を答えたことを記憶していますか。

彼は同意した。

さあ、我々に言ってください、何に向つて進む者と勇敢なる人々はある、と貴方は言われるのですか。臆病な人々が進む其事に向つてでしょうか。

彼は否定した。

ではそうでない事に向つて。

そうさ。

一体臆病な人々は無懼安心な事に向つて進み、勇敢なる人々は畏るべき事に向つて、ですか。（それとも其反対ですか）

おろソクラテス、人々によつてはそう言われている。

貴方の言われる所は尤です。しかし私は其事をきいているものではありません、むしろ貴方は、何に向つて進む者であるとその勇敢なる人々を言われるのですか。一体畏るべき事に、其が畏るべき事であると思つて、向うのですか、それとも畏るべきでない事にですか。

しかし少くも其事は、君の語つて來た所論の中に於て、既に意味を成し得ないこととして証明されたのだ。

其も貴方は正しく言われた。従つて若し其事が正しく証明されたのならば、何人と雖も、彼が畏るべき事であると思考する事に向つては進まないのである、自己に負けると云うことが無智であると発見された以上は。

彼は同意した。

しかし総ての人々が無懼安心のできる其事に向つて、総ての人々は進む、臆病者も勇敢なる者も、而して少くも此事によつて、同一の事に向つて臆病者も勇敢なる者も進むのである。

だが、ソクラテス、臆病者と、勇敢なる者との進むのは全然反対である。第一、戦争に向つて或者は進み、或者は進もうとしない。

そこで僕は曰つた

一体其が進むに美として、或は醜として。

美として。

さて若し美ならば又善である、と以前の論で我々は一致しました。なぜかと云えば美しき行為

は悉く善であると我々は一致したのですから。

君の言う所は真実だ、そして常に少くも儼にはそう思われている。

其は正當です。しかし貴方は、どっちの人々が戦争に行こうと意志しない、と言われるのですか、其が美であり善であるのに。

臆病者さ。

さて、苟くも其が美であり善であるならば、又快でしょう。

少くも其は一致されている。

では一体臆病者は、知つていながら、大いに美しく、善く、亦快なる事に向つて行こう、と意志しないのですか。

しかし其事を若しも我々が主張すれば、以前からの一致を破壊してしまうであらう。

では勇敢なる者はどうですか。彼は大いに美しく、善く、快なる事に向つて進まないのですか。進むと答えなければならぬ。

さて、勇敢なる人々は全然、よし恐るゝ場合でも、醜くい恐れを恐れはしまい、又醜くい無懼邁進を無懼邁進しはしまい。

必然。

若しも醜くきものでないなら、美しきものではありませんか。

彼は同意した。

若し美ならば、又善でしょう。

そうさ。

さて、臆病者も、無懼邁進する者も、狂気な者も、其とは全然反対に、醜くい恐れを恐れ、醜くい無懼邁進を無懼邁進するのでしよう。

彼は肯定した。

しかるに彼等が醜くい悪い事に無懼邁進するのは、無知、無学に因るに他ならないでしょう。

其通りだ。

ではどうですか。臆病者が臆病なる所以の其者は、其を貴方は勇敢と云うよりは、むしろ臆病と呼ぶのでしょうか。

少くも儂は、臆病と呼ぶ。

彼等は明かに畏るべき事についての無智の故に臆病であつたのですね。

彼は同意した。

臆病である所以の者は臆病である、と貴方によつて同意されているのですね。

彼はそうだと言つた。

では、畏るべき事と畏るべきでない事についての無智は臆病でしょう。

彼は頷いた。そこで僕は曰つた

そこで実際に勇敢は臆病の反対である。

彼は肯定した。

さて、畏るべき事と畏るべきでない事との智慧は、其等についての無智の反対でしょう。

其時にも彼は尚頷いた。

而も其等の無智は臆病ですね。

其時はやつとのことで頷いた。

従つて畏るべき事と畏るべきでない事との智慧は勇敢なのでしょう、其等の無智に反対なので
すから。

其時はもはや彼は頷こうともしないで、黙つてしまつた。そこで僕は曰つたのさ

どうしたんですか、おとプロタゴラス、私のきいている事を肯定もしないし、否定もしないと云うのは。

自分独りで梟けりをつけたがいゝ。

しかし唯一つだけ尚貴方にきいておきたいのですが、貴方には尚最初の様に、或人々は最も無智ではあるが、最も勇敢である、と思われませんか。

君は実にしつこいね、ソクラテス、儂が答える者であることに対して。だが君に満足を与えよう、儂は言うよ、一致した事からして其は意味を成さないと儂には思われるさ。

▲^{四十}そこで僕は曰った

決して私は他意あつて此等一切をきいているのではないのです、唯々徳に関する其等の事がどう云うものであるか、更に其事、即ち徳、は一体何で有るか、之を考察したいと希望しているに過ぎません。と云うのは、若しも其一事（徳自体）が明確に成るに於ては、かの事、即ち私と貴方が、私は其は教えられ得ない、又貴方は教えられ得ると主張しながら、互に永い間議論を戦わした其問題（徳之可教・不可教）も、全く明かになるに相違ないことを、私は知っているからです。然るに我々の此論の現在の状態は、人が我々を非難し嘲笑するかの如く、私には思われます、そこ

で若し其人が口をきいたとすれば、こう言うでしょう、『実に君等は妙な人間だね、ソクラテスにプロタゴラス。君は初めに徳は教えられ得ないものであると主張しながら、今は君自身に反対な事に熱中し、一切の事柄は、正義と思慮の徳も、更に勇敢も、其は知識である、と云うことを証明しようとしている、しかし其方法を以てすれば、特に徳は教えられ得るものであることが明かになって来よう。なぜかと云えば、若しも徳が、プロタゴラスが主張しようと試みていた様に、知識以外の或他の事であつたとすれば、明かに其は教えられ得るものではない。しかし今や、君の熱望している通りに、おゝソクラテス、其が全くの知識であることが明確に成るならば、教えられ得ない方が不思議の至りになる。又プロタゴラスにしても、先には教えられ得るものであると前提しながら、今は全く反対に、其は何でもよい、兎に角知識以外の事であることを明かにしようと熱望している者と殆ど変りがない。而も若しもそうだとすれば、就中教えられ得るものでは無くなるであらう。』と。

さて私は、おゝプロタゴラス、其等一切が上を下へと顛倒し、恐ろしく掻き乱されているのを見ると、特に其等の事を明確ならしめたい希望を持つのです、そこで如上の諸論を展開し来つた我々は更に徳に向い、其が何んで有るか、の解決に向つて出発し、茲に其について、教えられ

得るか、教えられ得ないかを、もう一度しっかり考察したく思います。而もあのエピメテウスが貴方の話の通り、あの分配に際して我々を疎かにしたと同様に、此考察に際しても、度々過つて、我々を陥れないようにしたいものです。私にはあの詩話に於てもエピメテウス（後慮）よりはプロメテウス（前慮）の方が遙に氣に入りました、そこで彼と同志になつて、私も亦前以て考慮をめぐらし、私自身の全生涯の為に其等一切の問題を論攻しようと計画しています、而も若し貴方に意が有るのでしたら、私が最初にも言つた通りに、貴方と俱に其等を研究するのが、特に悦ばしいのです。

するとプロタゴラスは曰つた

儂は、おゝソクラテス、君の熱心と論の展開とを称揚する。とにかく儂は自分で別に悪い人間であるとは思っていないし、特にも人を中傷することを好む者ではない、そこで又君についても、儂が会っている人々の中で、殊更にも其年輩の人々の中で、君には全く感心している、と今迄も多くの人々の前で公言した、しかし今も言つておこう、よし君が智慧に於て屈指な人物の列に入るとしても、儂は別に不思議とは思わない、と。だが其等の問題については、若し君が希望ならば、我々は又いつか研究することにしよう、しかし今は已に他の事に移り向う時である。

そこで僕は曰つた

ではそう為なければなりませんまい、其方が貴方に良いと思われるならば。又私にしても、先に言つた方へ赴くべき時はとうに來ているのです、たゞ此美しいカリアスを満足させようと思つて、留つていた次第ですから。

此等の事を言いもし、又聴きもして、我々は去つた。

(終り)

プロタゴラス篇注

第一節

1 アルキビアデス（紀元前四五〇—四〇四）は親族ペリクレスの主権者たりし時代に、クレイニアスの子として、アテナイに生る、政治家にして將軍たり、其行動及び運命はギリシャ史に見ゆ。富貴と容姿の美と多才とに恵まれ、更にソクラテスとの交際を楽しみ得たにも拘らず、彼は遂に道義的欠陥の為に破壊され終りし光彩の顯著なる例として後世に其名を遺してしまった。ソクラテスと彼との關係を時人は當時流行の男色關係と見た、而してプラトンは之を、但し弁護的否定的に、描写している。

2 狩り。美少年を追うことを狩りと云つていた。

3 あの男は、*canon* の読みを取つて訳出した、但し原典の批判には關係なし。

4 【髯萌え出でし…】 関接引用文、オディセイア第十歌二七九行、イリアス第二十四歌三八行。其第十歌の詩に曰く

かくて我、聖なる谿間たにを登りつゝ、毒草の数々知れる

キルケの大なる住居に到らんとしける時、

金の杖持つヘルメスは我にぞ遭えり

住居に赴く其路に、其姿は若き丈夫に似て

髯萌え出でつ、其若さこそげに優美の極みなれ。

オディセウスは茲にヘルメスより解毒薬を得てキルケの与えし毒杯を乾すことができた、次に見ゆるアルキビアデスの援助、後に現われるプロタゴラスの魅力、智慧深きソクラテスとオディセウスとの対比、引喩の妙は我々に想像の翼を生ぜしめる。

5 アブデラ。アイガイオンに面せるトラキア南岸の一市、デモクリトス及び此哲人の生地として名高し。
6 一緒に成る。師事するの意、原義に従つて訳す、其は、此字は他面エロスの關係を結ぶことに用いられ、
プラトンも亦此意を前意の中に多少含まして用ゆること多きを以ての故である。

7 交際。原義、一緒に居ること、先の一緒に成ると同様、師の下で学ぶの意有り、転じては学究的討論交際をも意味し、更に亦エロスの性交の意を有す。

8 パイス。奴隸、奴僕、従者のこと、原義は子供。

9 此一句【感謝が二重である】、諺的言い廻しと云うことである。

第二節

1 アポロドロス。此はシムポシオンの話者たるソクラテス狂とは同名異人とのこと。

2 オイノエ。アテナイの西北方、キタイロン山側の地。

3 サチロス。勿論バイスの名であるが、其面貌恐らくはバクコス神の従者サチロス（近欧語 Satyr）に似ている所より此名を得たのであらう。

4 語るに最も智。ヘラス語的表現、意識すれば雄弁なること。是に知るべし、ヘラス語の智 σοφός とは大にしては賢、小にしては一芸に堪能なるを意味することを。（此字に出づるソピステス（智者）の

第二十八節と第八節とに語られたる意を対照せよ）

5 中庭。アウレーと云う。ヘラス往時の家屋は中央に露天の此中庭を有し、諸室之を繞りて之に開いている、大家に有つては此に桂廊を繞らず、猶カリアス邸の描写に見るが如し。

第三節

1 ヒポクラテス（四六〇—三七七）コス島の人、医者、特にも医学の鼻祖として名高し。アスクレピアダイとは医薬神アスクレピオスの子孫なる意にして、医師の姓称の如く用いられている。

2 ポリクレイトス（五世紀）。彫刻家、スキオンの産、ペロポネソス半島の東北部に位するアルゴスに於て一家を起す、其作として「鎗持てる者」^{ドリフオロス}、アルゴスの神殿に建てられたる女神ヘラの金象牙像等最も名高し。

3 ペイディアス（四九〇—四三〇）はアテナイの彫刻家、アルゴスに行きアゲラデスの指導を受く。アテナ及びゼウスの神像を以て知らる。ペリクレスの尊重を受け、アクロポリスの偉觀を完成した、其後彼自身の肖像をアテナ神像の楯に刻みしによる不信神と、托されたる公財の消費との廉を以て死刑の宣告を受けた。一説には刑をエリスに逃れ、そこで金象牙のゼウス像をエリス人の為に作成せりとも云う。

4 ソピステス【ソフィスト】^{σοφιστής}とは其意哲学史に見ゆる如し。但し所謂る詭弁家の訳は当らず、注意を要す。今其字義について一言するに、此人称名詞は動詞 ^{σοφίζω} σοφίζω、^{σοφιστής} σοφιστής より作られ、前者に従へば「自己を智と為せる者」即ち「智者」（是れ恐らくは古来の義）或は「物の理を考察する者」、後者に従へば「智と為す者」「教師」の意である、而して此「智」の意味は前注に云える如し。

5 キタリス。所謂る楽器ギターである。

6 自由である者。奴隸に対して市民を云う。

第四節

1 有る。あるの意単に *copula* に留まらず、尚有なほの義を含む時、有字を用いる。此有これの義、プラトン思想の中に考えることを要す。【英語で言えば *Do* 動詞が「有る」という意に使われている時。】

2 【其名の語る通り、其者は諸智の智識です】此一種の説明は、当時のソピステスに対する尊敬を写して皮肉れる、字音上の、語源解説を真似た、しゃれである。つまり *σοφιστής* と二分して、*σοφιστής* *σοφιστής* (諸智の智識) に振り当てたのである。智とは本来人等にのみ加えられる形容詞であるが、此に諸智とは中性複数にて、智者の智たる其内容を意味する。

3 語るに畏るべき者。ヘラス語的表現、先の語るに智と殆ど同一義である。「畏るべき」と云う字の使用については第二十七節に言及されている。【この第四節においては本文では「畏」であるが、この注、また以降の本文では「↑ + 畏」の字形が使われている。藤沢令夫訳と対照した所では、「おそる」と読んで良い。恐れ多い、あるいは秀でているという意を持たせている。】

第五節

1 良く(悪く)行く。原語 $\epsilon\upsilon$ (κακός) πρᾶττειν [$\epsilon\upsilon$ ἢ κακός πρᾶττειν] に三義有り、即ち「良く行く」「良く行為す」「幸福である」、而して最初の意は稀に見る、物が主語の場合故、大別して二義となす、但し普通は「幸福である」と云う熟語である。プラトンは巧妙にも此両義を、二にして一なる様に、使して、徳と幸福と知識との一致に導いて行く。(第三十節等参照)【底本では「 $\epsilon\upsilon$ 」のアクセント記号が他に見当たらない形をしている。こゝは“Platonis Opera” TOMVS III を参照した。】

2 エリスはペロポネソス半島の西北部に在る都市。

3 ケオスは島の名、ケオス人については後に注す。

第六節

1 奄人。生殖力の無くなった(若しくは奪われた)者【宦官】。事実の如何は知らず、気のおつとりとした此番人の気を荒立てる所に描写の妙がある。

第七節

1 同母弟。カリアスの母、つまりヒポニコスの妻は後にペリクレスに嫁して此二児を産んだ。

2 カルミデスはプラトンの母方の叔父。従つて其父グラウコンはプラトンの弟に其名を与えた、従つて同名異人である。

3 アンチモイロスについては此処に語られてあるのみである。

4 オルペウス【オルフェウス】。詩話的人物、ムーサ・カリオペの子、音楽の天才にして、アポロンより与えられたるリラを奏するとき、山川草木に至る迄之に感動せざるは莫^なつた。然るに其恋人ユウリヂケ、毒蛇の一咬にあの世の人と成るに及んで、彼女を如何にもして取返さんものと茲にリラを手にしてハデスに訪ね下つた。彼の美妙なる管樂に動かされては何者も其路を碍^{さまた}げ得ず、終にハデスの帝王プルトンの前に立つを得た。さて此帝王によつて母デメテルの許より欺き奪われたる其妃ペルセポネは同情に堪えず、エウリヂケの再び此世に還えることを許すよう、帝王に乞ひ、又彼の妙技もプルトンの氷の如く鉄の如き心を溶かし得た、かくてプルトンは之に許して言うには、エウリヂケは汝の後より随いて行く、しかしハデスの門を出づる迄は振返つてはならぬと。こゝにオルペウスは喜び勇んで地上へと歩を進めた、しかし彼の後には何者の随き来る氣配もない、將に此世に出でんとして彼は堪え兼ねて後を振返つて見た、憐れエウリヂケの影は微かな嘆声を遣して掻き消されてしまつた。此より後は悲しみの余り人寰^{じんかん}を嫌い、口に恋人の名を叫びつゝ、リラに其苦悩を托して山野の中をさ

迷った、そして遂にトラキアの山中に於てバクコス神に発狂せる女人の一群と衝突し、八裂にされて、川の中に投げ棄てられてしまった。一説に其首は海に流れいで、レスボス島に漂着し、此処にムーサによつて葬られ、其墓はやがて社殿となり、又鶯は此島に於て特に美しく鳴くと云う。オルペウス教の名は此詩話より出たのであらう。

5 コロス χορός (chorus) は悲劇中の舞団、中央にコレーゴスと称する音頭取りが居て、其音頭に合せて舞踏する。屢々引かるゝ譬^{たとえ}である。

6 「彼をば次いで我は氣付き見ぬ」オディセイア第十一歌六〇一行。此第十一歌は、オディセウスがハデスの入口、此土地の果、キムメリオイの住める、日の目も見えぬ夕闇の国に到り、死せるテバイのテイレシアスの予言を聞かんと、地を掘りて施餓鬼^{ερεμν}を行い、幾多の幽霊に遭い、談を交せることを歌える、ネキイアと呼ぶるゝ一種特別なエポスである。今次に其一節を訳出する、プラトンの引喩についての解釈は自由である。

次いで彼をば我は氣付き見ぬ、力に強きヘラクレスを、
其幻影を。彼自らは不死なる神々と相与に

饗宴を楽しみつ、手足妙えなるヘーベを妻とせり、

威大なる神ゼウスと黄金の韃を穿てるヘーラーの娘をば。

さあれ彼の圀りには亡霊の、野鳥の如き叫びは有りき、

隅も無く彼等は恐れ戦けり。彼はかくて真墨の夜の如く、

袋を脱げる弓を持ち、矢をばゆづるにうち番え、

恐しき眼見開きて、射放つ者にさも似たり。

7 アクメノス、エリクシマコス。父子ともに医者。

8 ミリヌス。アチカの一區（デーモス）。

9 【「またタンタロスを……」同じくオディセイア第十一歌五八二行。詩に曰く

またタンタロスをば我はうち見ぬ、重き苦患に悩みつゝ

流るゝ水の中にぞ立てり、水は顎^{あご}までせまれども、

彼は渴^{かわ}ゑてそこに立ち、掬^くいて飲^のまん術^{じゆつ}もなし。

此老人のうち跼^{せく}み、飲^のまんとあせる度毎に、

水は流れ失せ去りて、かくて足の圀りには

黒き土くれ現われり、鬼はそこを乾かして。

タンタロスはリヂアの王、ゼウスとプルトとの間の子。彼が地獄に餓鬼の苦を受けている理由として諸伝説が有る、或は云う、彼は神々の集會に参与することを許されていた、然るに神の全智を試みんものと、己の子ペロプスを殺して、之を其食膳に供した、其罰であると、又タンタロスの富と云うことも諺になつてゐる。さて前後の両比喩を以て智慧深きオディセウスのソクラテスはカリ阿斯邸をハデスにしてしまつた、プロヂコスもヒbiasも幽霊である、プロタゴラスはオルペウスの故に危く助つてゐると考へてみたものだろうか。タンタロスの富とプロヂコスの智慧、渴に苦しめる者と病身であつたと云うプロヂコス、其彼が宿ると同時に空けられた宝蔵。此比喩も尽きぬ想像を生む。

10 ケラメイス。アチカの一デーモスの名。

11 パイヂカ。恋されてゐる美少年。

第八節

1 ヘシオドス。紀元前七〇〇年頃榮えし教訓詩人、「仕事と日歴」及び「神統紀」なる詩今に存す。ボイオチアはアスクラの産、弟ベルセス、其都市の権力者を買収し、訴訟に勝つて遺産を横領してしまつた、「仕事と日歴」は此弟に対する教訓の形になつてゐる。そこで彼は故郷を棄て、コリントスに余

生を送つたと云う、伝説によれば其所で殺害された。

2 シモニデス（五五六―四六八）彼はピンドロスと並び称さるゝ抒情詩人の巨擘きよはくである。ケオスの産、アテナイに暮し、又テタリアに住し、最後にシケリアの王ヒエロの朝に死す。其詩の断片今に残る。

3 ムサイオス。伝説的人物にして、或は云う、オルベウスの子、或は云う其弟子、或は云うトラキアの人、或は云うエレウシスの人、或は云う詩人、或は云う神託の予言者、かゝる諸説によつて推するに、オルベウスと同様、神秘教の中心に呼ばるゝ名である。

4 イコス。四七〇年に於けるオリムピアの勝者、体操に適する最善の生活法を説ける人であると云う。タラスは所謂タレント。

5 ヘロデコス、体操教師にして医者、食餌療法を創む。メガラはアテナイ西北、コリントスに到る途の都市。セリムブリア【Selymbria】はプロボンチス【イスタンブル附近の内海】の沿岸に在り。

6 アガトクレス。ペリクレスの音楽教師として、又其政治的権識に於て有名なるかのダモンの師。

7 恐るべき事【一度も無かつた】。此処に掲げられた諸名士については知らないが、特にアテナイに於て、其頭角を顕わした人々で、死刑乃至追放の罰を市民より受けた者は甚だ少くない、而してプロタゴラスも晩年に不信神の廉を以て死刑の宣告を受けた、彼はよつてアテナイを遁れ、シケリア【シ

チリア】に渡る途中、難破して死んだ。

- 8 恋人。意識すれば崇拜者とでも云うのであるが、それではエロスの情趣が失せて面白くない。(第一節注一緒になる、交際、参照)

第九節

- 1 善。ヘラス語の *εὖρος* 【アガトス】も智(第二節注)と同様、堪能、優秀、時に勇敢等の意味をも持つ。

第十節

- 1 プリタネイス。五十名からなる議会の最高委員。
2 治政。都市総体の議事とは祭典、立法、公判、戦争等に関することであろう。
3 徳。ヘラス語の *ἀρετή*、【アレテー】も其意は智、善と同様である。つまり此処で徳とは政治的権識を指している。

- 4 詩話と理実。 *μῦθος*(myth) 【ミュトス】と *λόγος* 【ログス】とは当時好んで立てられた談し方の区別である。詩話は仮空的、理実は俱体的【具体的】な事を語る。プラトンも大いに此区別を利用してゐる、

しかし彼にあつてロゴスとは理論である、なぜかと云えば彼に於て経験的事実より理論の方が一層俱体的【具体的】であつたから。

第十一節

1 プロメテウスとエピメテウス。此詩話は幾多の詩人によつて種々に取扱われた有名な話である。プロメテウスは前慮、エピメテウスは後慮と訳す。

2 ヘパイストスとアテナ。ヘパイストスは拉典名で Vulcanus と云う、火を司る鍛冶の主神。アテナは智慧、芸術等の主神。

3 政治的。原語は πολιτικόν【ポリティコン】(politic)にて、都市 πόλις より出でし形容詞である、従つて若し茲で「都市に関する」「都政上の」等の訳を用いたならば、特に此詩話に美しき調和を齎らし得たであらう。政治的、此訳語にはかゝる本義有りと知るを要す。反対に都市は我々の世界に移して国家である。

4 アクロポリス。ヘラスの都市は、スパルタを除いて、皆、要害の為に、丘陵の上に築かれていた、アクロとは頂上の意。つまり丘陵の頂上をポリスの中心として、之を繞つて城壁が作られてあり、之

を名づけてアクロポリスと称した。今は勿論比喩的使用で、宮城とでも訳し得よう。

- 5 刑罰。プロメテウスは此事によつて、カウカソス（高架索【コーカサス】）山中の岩に縛され、毎日兀鷹^{はげたか}に其肝臓を喰い取られた、其肝臓は而も夜の中に元通りになるのであつた。後にヘラクレスにより救われたと云う。

第十二節

- 1 ヘルメス。神の使者の名。

- 2 畏敬と正義。αἰδώς τε καὶ δίκη. 已に昔ヘシオドスは其詩「仕事と日歴」二〇〇行に畏敬と懲罰(Αἰδώς καὶ Νέμεσις)の二女神の白衣を纏いて人の世を棄て、オリムポスに歸えり、かくて悩ましき苦痛は死すべき人々に遺され、もはや悪よりの守護は有るまい、と歌つて澆季^{ぜうき}をなげいている。我々は茲に此詩人の人生觀に於て、此両者が文明社会を成立せしむる二要素たるを推考し得る。さて畏敬とは云わばカントの *Achtung fürs Gesetz* 【法の尊重】で、正義を畏敬し、よつて正義を履^ふむの心であり、之に對して正義とは、我々の云う正義と稍其範圍を異にして、ヘシオドスの所謂^{いわゆる}ネメシスと同様な懲罰の意を強く含んでいる。社会成立の要素として古來指示されている此二要素は西欧文明社会の特性を

なしている。

3 総てに互つて。或原理が万人に内在すると云うことは、カントの *Reich der Zwecke* 【目的の王国】の思想と同様、西洋の哲学的論理では説明することはできない。其は全く一の信念として、ドクサ、主張の形式を取るにあらずんば、詩話を以て語らるゝ外に術が無いであらう。

* 【「俱有」第二十節の注1を参照。】

4 思慮の徳。 *συνεσφροσύνη* は種々の意味に用いられる。通俗の意味は狭義なる節制の徳（パイドン六八）であるが、其原義、健全なる（*συν*）心（*φροσύνη*）の働き、状態よりして、常識更に知識（当篇第二十節、カルミデス）又は、直ぐ次の説明に見ゆる如く、狂氣に対する正氣（パイドロス篇に於ても同用）の意を有っている。さて以前の二要素に望むれば、正義の徳 *δικαιοσύνη* が正義及び畏敬に相当する訳である、而して此正義に連れて更に思慮の徳が挙げられたのである、なぜかと云えば此両者は常に離れずに連呼され、政治的徳（所謂る国民道德、社会道德）と称されているからで、是も（徳の）概念の発展である。

第十三節

1 【不正を行わないように。】懲罰の目的をギリシャ人は古代に於て単に惡しき行為の償いと見ていた。此見解を特にも悲劇作家は保持し深刻にしている。併しアイスキロス、ソポクレス及び思慮深き抒情詩人ピンダロスは他面に於て、懲罰が又人々の為に改善と警告との使命を持つてゐることを已に認めてゐる。此よりして此所謂る罪惡威止説は起り、且プロタゴラスによつて恐らくは直截に言い表わされたのであらう、而して此説にプラトンも亦、但し道義的に高尚化せる書き方を以て同意を表してゐる。
(Deuschle) 【Julius Deuschle ドイツ語版編者】

第十五節

1 パイダゴゴス。pedagogue 【教育者】の語源になつてゐるが、當時の使用に於ては奴隸にして子供の守りをする者のことである。

2 正す。原語 *euboukein* は、不正を正す、従つて罰するの意と、曲を直く【曲直】するとの両義を含んでゐる、よつて正義（処罰）の方には直の義を、次には正の義を配して訳した。

第十六節

1 レーナイオン。アテナイ市の、ゼオニソスに神聖なる一区域にして、此神の二つの社殿と其劇場とが建つていた。因みに此劇は四二〇年に上演されたと云う、すると此篇の背影の年代は四一九年の訳になる。

2 エウリバトスとプリノンダス。悪人の典型として常に其名が呼ばれていた。

第十八節

1 智慧と勇敢。最初に正義と思慮との二徳を数え、次いで敬虔を加え、今や巧妙なる導入法を以て智慧と勇敢を挙げ、茲に所謂ヘラスの五徳を数え尽している、是も(徳の)概念発展の一現象である。

2 敬虔なる者が有る。此言い廻しは漢文に則つたので、有敬虔者の返り読みである。ヘラス語では *εὐρί τις ὀσίονς*、やて此 *τις* 或は多くの場合中性に呼んで *εἰς* は、普通に「或る」及び「或るもの」の義である、そこで例えば(プラトンに於てよく形容詞が使用されているが故に) *καλόν* *εἰς* と云えば、「或る美なる物」 *etwas schönes, something beautiful* となる、しかしプラトンの而も上の様な言い廻しに於て、*εὐρί τι καλόν* と云うならば、(勿論「或る美しいものが有る」と云う意味にもなるが)美と云うものが有る、即ち其有るものは美と云うことであると云う意なのである。そこで此句を独逸語訳では

Es ist etwas schönes = There is something beautiful. と片付けているが、其意は定かでない。むしろ此は或る対象を指示するものとして、実は漢文の者字と善く合致するのである、そこで其句を有美者と訳すと最も工合が宜い。此有美者の美字は者字の形容詞ではなくて述語的名詞的者である、同様に καλόν に於ける καλόν も述語的名詞的者であり、従つて敬虔（名詞）なる者有り（と全く同一構造を為しているのである。そこで敬虔なる者有りと云えば、敬虔と云うことを或一つの対象として指示して、其が有ると云う意味である。以後「善なる者が有る」等の訳、皆之に倣つて解さねばならない。

第二十節

1 【よつて、俱に、因つて】以上の過程に傍点を施して注意を喚起せる三様の言い表わしが有る。最初「思慮深く」とか「強く」とか副詞的に言い表わしたことを、次には名詞に更えて、よつて、俱に、因つての三様に説明している。仮名で「よつて」と訳したのは、其名詞が独立に第三格即ち dativus 【与格】に立っていることを示しているのだ、此第三格は此種の意味に於て度々プラトンによつて使用さるゝ、俱行的 (of accompaniment 【附随的】) と同時に原因的 (causal) 第三格、つまり dativus methodi と名づけられたら然るべき所性の格である。此両義を明かにする為に、俱行的の方を「俱に」*ἑνῃ* 原因的を「因

つて」*εφο*なる前置詞を用いて表わしている、而して此 *εφο* は、今迄の過程に於て既に「俱有する」*heteroiv mit sich tragen*【持ち歩く】）と云う言葉を使用した、其俱字の義と合致するのである。副詞的表現を名詞的に打ち代えんとせる意図は、一面上述の如き思想上の深刻を明示すると同時に、他面其名詞化によつて対象化し、其上で彼の結論に導かんが為である。

第二十二節

1 トリボン。ソクラテスの常用していた外套、云わば半纏。^{はんてん}

2 愛智心。原語は *φιλοσοφία*(philosophy) 後には凡て哲学と訳した。^{すべ}

3 クリソン。スタヂオンに於ける四四八、四四四、四四〇年の勝利者。

第二十三節

1 【プロヂコスが曰つた】次の一節はプロヂコスの智として有名なる *Synonymik* (同類語分別) の標本である。のみならず其中の大抵の文字が双聯している、但し此形式中に盛られた内容はプラトンのものである。

第二十四節

- 1 自然と法習。Φύσις, νόμος、【フシシス＝自然とノモス＝法律・習俗】の対立的考え方も、詩話と理実の如く、当時好んで試みられたものである。我々は此の見方にヘラス文明、更に引いては西洋文明の一特性を味い得よう。更に此処に書かれてある、法習は自然に反するとの見解はヒピアスの主張であつたと云う。
- 2 プリタネイオン。譬喩^{ひよ}的使用、而して其原義は先に証せるプリタネイスの庁舎、従つて一国政治の主脳部のことである。

第二十六節

- 1 クレオン。テタリアの専制君主、彼の許にシモニデスは一時寓していた。次の詩は彼が、四頭立て戦車の競走に於けるスコパスの勝利を祝つたものである。此篇で次に現わるゝ句は、此詩の今に残存せる断片の全部であるが、最初の二行の次が数行欠けている。
- 2 ヒタコス。所謂ヘラスの七賢人の一人（第二十九節参照）
- 3 【ホメロス】イリアス第二十一歌三〇七行。スカマンドロスはトロイアを流れている川の名、シモエイスは其支流。人間化して其川の主を云つたものである。シモエイスとシモニデスとは口合【語呂】。

4 成ると有る。此區別は更に發展して、ゴルギアス篇に到つて哲学思索の中心に入り来る。

5 「善き者と成るのは困難である…」間接引用文。「仕事と日歴」一八九以下に曰く

徳の前に汗をば不死なる神々は措き給えり、

かくて其への山路の長くも亦嶮しく、荒れたり

最初には。され人若し其頂に達しなば、

其後はいと容易なれ、いかに（其徳の）苦しかりしとて。

プラトンは此引用に於て、「其を所有するに」の一句を説明的に加えている。

第二十七節

1 劣つたこと。血迷つたプロタゴラスには、「容易」の一字が御氣に召さなかつた。容易なことはなる程劣つたこととも解される、そこで旋の曲つたソクラテスは困難を悪いと取つて皮肉つている。

2 レスボス。ヘレスポントスの西南海中の大島、此処はアイオリス即ちエオリア方言の中心である。

此方言はイオニア、ドリア（スパルタ中心）と並んでヘラス語の三大方言をなしている。然るにソピステスは最も文章燦然たるイオニア語を最も善き標準語とする見解に捉われたる狭隘からして、エオ

リア方言を粗野となしていた。プロタゴラスの此反駁はかかる狹隘の難点は別問題として甚だ當を得ていないことは一目瞭然であろう。

3 【証拠立てていますから。】儼は良く知っている、と云う今時の智者にも有りがちな主張を以て、プロタゴラスは論駁せんとした、しかし其は主観的なもので真の論証にはなっていない。之に反してソクラテスは客観的に其次の詩句を引いて証拠立てゝいる。

4 ケオスの者。ケオスの人はたんげん端嚴を以て聞えていた。

第二十八節

1 クレテやラケダイモン。所謂るクリート島とスパルタはアテナイに比して文明が劣っていた。其は事実である、しかるにプラトンは常にスパルタに肩を持っていたのである。文明と云うことは必ずしも精神的実行力の強さとは一致しない、そこで恐らくプラトンは華美にして多弁なるソピステスにイオニア式文華の型を見、無飾單純にして強きソクラテスにラコニ式の型を見たのであろう、従つて又ラコニ式をソクラテスによつて理想化しているとも考えられる。

2 ラコニ主義者、ラケダイモン、ラコニゼイン。アテナイ市がアチカの主都である様に、スパルタは

ラケダイモンの主都である、此ラケダイモンの事を愛好し、真似、尊重することをラコニゼインと云う、其名詞形はつまりラコニ主義である世に云う *laconismus* とは此ラコニ主義であるが、此名詞形は原文には出ていない。

3 【タレス以下キロン】以上に掲げられた人々は有名なるヘラスの七賢人。彼等の姓名と伝説的教訓とが編まれた詩が有る、参考の爲、Voss の訳を其俟次に掲げて置く。

„Mass zu halten ist gut“; dies lehrt Kleobulos aus Lindos.

„Jegliches vorbedacht“; lehrt Ephyras Sohn Periandros.

„Wohl erwäge die Zeit“; sagt Pitakos aus Mytilene.

„Mehrere machen es schlimm“; wie Bias meint, der Priener.

„Bürgerschaft bringt dir Leid“; So warnt der Milesier Thales.

„Kenne dich selbst“; So befehlt der Lakedämonier Chilon.

Endlich „Nimmer zu Sehr“; gebt der Cekropier Solon.

【第三十一節】

＊【「誉めよう」にも注の＊が付いているが、それに対応する注釈文は底本には無い。】

第三十三節

1

【俱に兩人で】イリアス第十歌二二四行。詩に曰く。

彼等にかくて勇しきゾオメデスは呼ばわりぬ――

「ネストル。我をば雄々しき心と意は励ませり

ま近に陣せる仇の者どもの、トロイア人の軍隊を

襲わんことに。さあれ若し何人か他に我と俱に来りなば、

一際の安心と又一際の勇気をば我は持ち得ん。

俱に兩人で進みなば、他は他の者に知らしめむ

利益のあらん手段をば。しかし若し唯独りにて思う時、

いとも短し其思慮は、薄くも足らじ其智謀。」

第三十四節

1 無懼大胆。θάρρος と云う字は種々の意味を持っている、其多様の意味が、此命題を中心として、第三十九節に於て使用されている、例えば無懼安心、無懼邁進の如くである。そこで若し全て意識に止めておくと、此節と後節との関聯が絶えてしまう、そこで無懼の二字を冠して其等が同一語根に属することを示さんとしたのである。

第三十五節

1 良く生きる。εὖ ζῆν は先の「良く行為す」と、「幸福である」と云う意に於て全く同一表言である。前節に於てプロタゴラスはまた美しき脱線をした、そこでソクラテスは矢庭に對論の方向転換を試みたのである。

底本：『プロタゴラス』岩波書店 1925（大正14）年2月20日発行

作成者：石井彰文

作成日：2015.6.18